

Newsletter

No. 3 | September 30 2018

東京医科歯科大学ラテンアメリカ共同研究拠点

多様性と相乗的発展

東京医科歯科大学は「知と癒しの匠を創造し、人々の幸福に貢献する」の基本理念のもと、東京から世界へと翼を広げ人々の健康と社会の福祉に寄与するべく国際展開にも注力しています。本学はその実績とポテンシャルにより、文科省が2014年に開始したスーパーグローバル大学創成支援事業のトップ型に採択されたことを契機として、一層の国際展開を推進しています。海外派遣学生は学部生を中心にここ数年、毎年300名を超えており、多くの国において多様な環境で学びの機会を得ています。

チリ、タイ、ガーナに設置された海外拠点は本学の国際展開の要です。2018年4月に特命副学長(国際担当)を拝命し、6月のタイに続き7月にチリを訪問して、教育・研究プロジェクトの今後について打合せました。2泊3日と短期間でしたが、本学のチリ拠点であるラテンアメリカ共同研究センター(LACRC)を皮切りに、クリニカ・ラス・コンデス(以下CLC)、チリ保健省、在チリ日本国大使公邸、チリ大学医学部、サン・ポルハ病院、国際シンポジウムENDOSUR会場等を訪問して関係の先生方と意見交換をし、また大腸癌早期診断プロジェクト(PRENEC)関係者とも面談しました。訪問した先々で本学の寄与への謝意とともに今後の期待を寄せられ、これまで先陣を切ってご尽力された本学の先生方に敬意の念を禁じ得ませんでした。同時に、日本側とチリ側が相補的な連携をすることで相乗的な発展につながるとの認識を新たにしました。

2007年盛夏1月に訪れて以来のサンティアゴの景色の記憶は薄れており、アンデスの山々へ続くスモッグの層を見て、はたと蘇った他に頭に残った紫のジャカランダの花は真冬の7月に望むべくもなく、プラタナスの乾いた葉と鈴懸様の実のカサカサ感が今回の印象です。思い出したのは、ラテンアメリカ各国から選抜された学生への幹細胞教育プログラムに招かれ、2週間宿とチリ大学を往復した日々。学生達と三度の食事を共にしながら教授陣が講義・実習・プレゼン指導をし、多様なレベルと学問背景の学生がインタラクティブにグループプレゼンテーションを完成させていったこと。今回の訪問では、本学医学科のプロジェクトセメスター学生とジョイント・ディグリー・プログラム大学院生にも会い、チリという異文化環境での戸惑いにも適応しつつ励んでいる様子を見ました。彼らもきつと多様性に触れながら自身の能力を相乗的に伸ばして行くに違いないと思いつつペンを置くことにいたします。本学のチリでの活動に御関係の先生方におかれましては、引き続き本学の国際展開にご支援を賜りますようお願い申し上げます。

特命副学長(国際担当)・統合国際機構長
田賀哲也

LACRC TMDU
IN CHILE
Latin American Collaborative Research Center
Santiago de Chile



Contents

ご挨拶	1
TMDU訪問団の活動報告	2
JDプログラム	7
PRENECの進捗状況	8
プロジェクトセメスター	9
活動報告	10

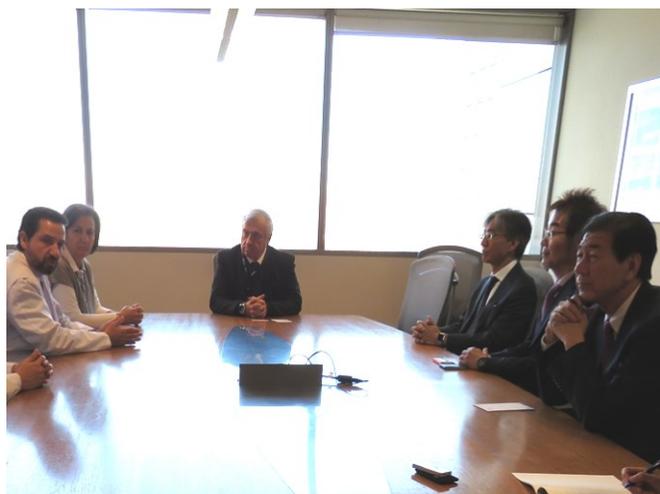
TMDU訪問団の活動報告

本学の田賀哲也特命副学長、安野正道特命教授、ソニア・レオン・カマラ国際交流課総務係員の3名からなる訪問団が7月29日からチリを訪れました。本号では訪問団の活動をお伝えいたします。

クリニカ・ラス・コンデスにおける会議

7月30日午前、訪問団はCLCを訪れ、PRENECにおける今後の本学の方針について協議を行いました。この会議にはCLCよりマニャリッチCEO、チョマリ院長、PRENEC責任者のロペス医師（大腸肛門科長及びがん研究所長）、PRENEC業務補佐のサラテ医師が出席し、本学からは訪問団に加えて、招聘を受けて訪智中の江石義信教授、LACRCの小田柿智之助教、松宮由利子医師が出席しました。会議後には、田賀哲也特命副学長よりロペス医師へ本学の客員教授辞令の授与が行われました。

またこのCLC訪問に併せて、CLC内に位置する本学の拠点であるLACRCオフィスも訪れました。



会議の様子



左より江石教授、チョマリ院長、田賀特命副学長、マニャリッチCEO、ロペス医師、安野特命教授、ソニア係員、サラテ医師



客員教授辞令を受けるロペス医師(左)



LACRCオフィス前にて記念撮影(左よりサラテ医師、安野特命教授、田賀特命副学長、小田柿助教、松宮医師)

チリ保健省における江石教授の顕彰式

7月30日午後、チリ保健省において江石教授のこれまでのチリにおける功績を称える顕彰式が行われました。式典には、チリ保健省サンテリセス大臣、ゴイック上院議員、モレイラ上院議員、チリ国際協力開発庁(AGCI)リラ長官、在チリ日本国大使館の平石好伸大使、倉田進一等書記官、JICAチリの半谷良三所長、小林としみ所長代理にご臨席を賜りました。



左よりロペス医師、平石大使、サンテリセス大臣、江石教授



記念品贈呈の様子

在チリ日本国大使公邸へ訪問

7月30日、平石大使御夫妻の御厚意により、本学訪問団、江石教授、小田柿助教、松宮医師を招いての夕食会が、在チリ日本国大使公邸で開催されました。会には本学職員の他、大使館の倉田一等書記官、JICAチリの半谷所長も参加されました。



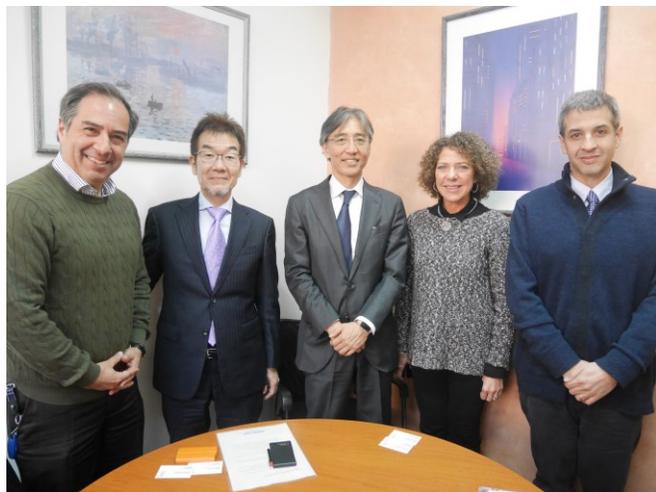
左より平石大使夫人、田賀特命副学長、平石大使



平石大使らと記念撮影

チリ大学医学部訪問

7月31日午前、本学訪問団がチリ大学医学部を訪れ、オライアン教授、トレス准教授、アウマダ国際交流課副課長との打ち合わせが行われました。この打ち合わせでは、今後の大学間の新たな展開や、ジョイント・ディグリー・プログラム（以下 JDP）に関する協議が行われました。打ち合わせ後には、田賀特命副学長よりオライアン教授へ本学の客員教授辞令の授与が行われました。



打ち合わせ後の記念撮影



客員教授辞令を受けるオライアン教授(左)

サン・ボルハ病院訪問

7月31日、本学訪問団がサン・ボルハ病院内の日智消化器病研究所を訪れ、エステラ所長と面会をしました。エステラ所長から、LACRCの歴代の赴任者のPRENECへの貢献に対して、感謝の言葉をいただきました。



左より小田柿助教、エステラ所長、田賀特命副学長、安野特命教授



日智消化器病研究所の説明を行うエステラ所長(右)

国際シンポジウムENDOSURへの参加

7月31日午後、サンティアゴで隔年開催されている国際シンポジウムENDOSURへ本学訪問団が訪れました。会期中には、江石教授、安野特命教授、小田柿助教が消化管疾患に関する講演及びワークショップへ参加しました。本学以外にも日本より国立がん研究センター中央病院の松田尚久医師、京都府立医科大学の吉田直久医師が招聘され活発な意見交換が行われました。また、講演の為に来智していたエクアドルのモンタルボ医師と訪問団が面会をし、同国のがん検診の状況について意見交換を行いました。



モンタルボ医師(左)と田賀特命副学長



発表を行う江石教授



会場前にて記念撮影



左より吉田医師、小田柿助教、松田医師

安野特命教授による外科指導

8月の第2週から3週にかけて、チリ国内の地方都市マイプ、ロス・アンヘレス、オソルノの病院にて安野特命教授による手術技術指導及び、講演が行われました。日本の術式にチリ人医師から多くの関心が向けられました。



マイプにおける大腸外科チームとの記念撮影



ロス・アンヘレスにおける手術指導の様子



オソルノにおける講演後の記念撮影



オソルノにおける手術指導の様子

ジョイント・ディグリー・プログラム

9月にチリ大学及びCLCの医師2名が本学を訪れ、JDPの運営について情報交換及び協議を行いました。また昨年同様本学及びチリ大学の合同教職員FD研修を実施しました。本号ではその様子をお伝えします。

チリ大学教員による本学訪問及び JointWorkShop2018@TMDU

本年9月28日にCLCのトレス准教授及びチリ大学のシステルナス医師が本学を訪れ、JDPに係る打合せ及び教職員FD研修「Joint Workshop 2018@TMDU」を行いました。

今年度のFD研修は、効率化の観点から短時間で実施し、JDPの専任教員や学生を含め小規模ながら充実した研修となりました。



JDP 打合せの様子



「Joint Workshop 2018@TMDU」の様子



左より植竹教授、小嶋教授、秋田JDP推進部門長、トレス准教授、システルナス医師、田賀特命副学長、岡田講師

PRENECの進捗状況

大腸癌早期診断プロジェクト(PRENEC)の最新情報をご報告いたします。現在、プンタ・アレナス、サンティアゴ、バルパライソ、バルディビア、オソルノ、コキンボの6都市でプログラムが行われています。6都市に加えて、コンセプション及び国外パラグアイでは、PRENECの開始に向けての準備が進行しています。

PRENECに関する論文がいくつかの医学誌に掲載されましたので、本号ではその内容をご紹介します。

PRENECに関する論文の掲載



Histopathologic study from a colorectal cancer screening in Chile: results from the first 2 years of an international collaboration between Chile and Japan

Kobayashi, Maki^a; Kawachi, Hiroshi^a; Pasternak, Samara^a; Delgado, Carlos^a; Pinto, Pablo^a; Ito, Takashi^a; Karelavic, Stanko^a; Carrasco, Hernan^a; Tanaka, Koji^a; Okada, Takuya^a; Odagaki, Tomoyuki^a; Zárate, Alejandro J.^{a,b}; Ponce, Alejandra^a; Kronberg, Udo^a; López-Köstner, Francisco^a; Tsubaki, Masahiro^a; Kawano, Tatsuyuki^a; Eishi, Yoshinobu^a

European Journal of Cancer Prevention: June 28, 2018 - Volume Publish Ahead of Print - Issue - p
doi: 10.1097/CEJ.0000000000000454
Research paper: PDF Only

学術誌European Journal of Cancer Preventionオンライン版掲載記事より
掲載内容URL: https://journals.lww.com/eurjcancerprev/Abstract/publishahead/Histopathologic_study_from_a_colorectal_cancer.99250.aspx



Digestion

Short Communication

A Pilot Trial to Quantify Plasma Exosomes in Colorectal Cancer Screening from the International Collaborative Study between Chile and Japan

Kobayashi M.^a · Kawachi H.^a · Hurtado C.^b · Wielandt A.M.^b · Ponce A.^b · Karelovic S.^c · Pasternak S.^d · Delgado C.^d · Pinto P.^d · Carrasco H.^e · Ito T.^a · Okada T.^a · Tanaka K.^a · Odagaki T.^a · Zárate A.J.^b · Kronberg U.^b · López-Köstner F.^b · Tsubaki M.^a · Kawano T.^f · Eishi Y.^g

Author affiliations

Keywords: Plasma exosomes · Colorectal adenoma · Colorectal cancer · Screening · Immunochemical fecal occult blood test

Digestion 2018;98:270-274

学術誌Digestionオンライン版掲載記事より
掲載内容URL: <https://doi.org/10.1159/000490559>

本年6月、LACRCの前赴任者である河内洋医師及び小林真季研究員が取り組んできたPRENECに関する論文「Histopathologic study from a colorectal cancer screening in Chile: results from the first 2 years of an international collaboration between Chile and Japan」がEuropean Journal of Cancer Prevention誌に掲載されました。この論文は、プンタ・アレナスにおいてPRENECが開始された2012年から2014年の2年間における、病理組織学的検討結果をまとめたものです。初期PRENECにおける象徴的な成果の一つである、陥凹型早期大腸癌の発見についても述べられています。

また8月には、同氏らによる論文「A Pilot Trial to Quantify Plasma Exosomes in Colorectal Cancer Screening from the International Collaborative Study between Chile and Japan」が雑誌Digestionに掲載されました。本研究ではプンタ・アレナスにおいてPRENEC参加者の血液サンプルをもとに血漿エクソソームの含有量を検討しました。癌患者と腺腫の段階までにとどまっている患者を比較した結果、前者は後者の約2~3倍の血漿エクソソームが測定され、このことから血漿エクソソームの測定は大腸癌高リスク群のスクリーニングに有用であることが示唆されました。

これらに加えて、チリ側からもロペス医師・サラテ医師らによる論文「Programa multicéntrico de cribado de cáncer colorrectal en Chile」がチリの医学雑誌 Revista Médica de Chileに掲載されました。この論文ではチリ国内の複数施設で行われているPRENECの2012年から2015年における検診参加者12,668名の結果を分析しています。本検診プログラムでは免疫学的便潜血反応検査において高い回収率が達成され、また癌と診断された患者の多くが内視鏡によって治療されているという成果が示されています。

掲載内容URL: https://scielo.conicyt.cl/scielo.php?script=sci_abstract&pid=S0034-98872018000600685&lng=es&nrm=iso&tng=en

プロジェクトセメスター

本学は、2010年から学生海外基礎医学実習(プロジェクトセメスター)の目的で、医学科4年生を約4～6カ月に渡ってチリの研究施設に派遣しています。

今号では、6月初旬より研究に取り組んでいる2名の学生からチリの生活の様子をお伝え致します。

学生チリ滞在記

川上七海 チリ大学 感染症学研究室所属

光陰矢の如しで、5月末に始まったチリでの生活も残すところ1ヶ月強となってしまいました。9月はチリ独立記念日がありチリ全体がとても盛り上がっています。街中に国旗がはためき、あちらこちらでチリの伝統的な踊りが披露されている光景に最初はとても驚きました。

ノロウイルスのジェノタイプングというテーマで進めている研究も最終段階に入ってきており、PCRなどの手技を使う場面が終わりつつあります。今後はシーケンスの結果をまとめて最終発表に向けた準備を行っていく予定です。

生活面としては、休暇や独立記念日周辺の祝日を使って南米旅行を楽しみました。遊びに来てくれた大学の同級生と共にペルー、ボリビア、チリ北部をまわり、マチュピチュ、ウユニ塩湖、アタカマ砂漠など南米を代表する地域を見てきたり、医科歯科大学から同様に留学している松宮先生と隈くんとアルゼンチンのイグアスの滝の観光に行ったりと盛りだくさんの1ヶ月を過ごすことができました。

チリ生活も終盤に差し掛かりますが、最後まで研究もそれ以外の時間も充実したもののできるよう精一杯取り組んでいきたいと思います。



南米旅行は一生の思い出になりそうです

隈 宙音 チリ大学 腎臓病学研究室所属

こんにちは！6月よりチリ大学医学部腎臓病学研究室に派遣されております医学科4年の隈宙音です。段々と暖かい日が増えており、春の兆しを感じるようになってまいりました。

今月は少し長めの休みを頂き、国内外を旅行してきました。まずペルーに始まり、ボリビア、チリ(アタカマ砂漠)、ウルグアイ、アルゼンチン、そしてパラグアイと、近隣諸国を大方周ることが出来たのではないかと思います。駆け足になってしまったのでゆっくりと現地の雰囲気を堪能することは難しかったのですが、日本では「南米」と一括りにされてしまいがちなこれらの国々もそれぞれ特徴があり、時には同じ大陸にあるとは思えないほどの違いを感じることもできました。

研究についてですが、土日にもラポに出向いて実験していたおかげか、初めは失敗の連続だった実験技術がようやく身についてきました。残りの滞在期間は長くありませんが、後悔の無いよう、精いっぱい努力し続けてまいります。



パラグアイのイグアス移住地の畑の様子。60年以上前に移住した時にはただジャングルが広がっていたそうです。

LACRC活動報告

日智消化器病研究所主催のアクティビティへの参加

8月15日、サンボルハ病院の日智消化器病研究所の医師・看護師らを対象としたチームワークを高めるためのアクティビティに小田柿助教が招待されました。本学からの赴任者もチームの一員として認められていることは、長年の活動の積み重ねによる成果であり、今後も良好な関係を保ちながらチリの医療に貢献していければと思います。



日智消化器病研究所のスタッフとの記念撮影

研究会における発表



8月31日、小田柿助教がチリの癌研究会グループであるGOCCHIの開催する研究会 1st Update Course in the Treatment of Gastrointestinal Tumorsにて食道胃接合部がんの内視鏡治療に関する発表を行いました。

編集後記

チリの独立記念日である18(ディエシオチョ)が過ぎ、暦上では春を迎えましたが、ここ2週間程寒い日が続きアンデス山脈の頂が再度、冠雪を見せました。新芽をつけ始めた木々はつぼみを開かずじっと春を待っているようですが、ここ数年チリでの花粉症に悩まされる私としては少しでも遅い春の到来を願うばかりです。

今後も本Newsletterを通してLACRCの活動を報告してまいります。(早川美貴)

東京医科歯科大学ラテンアメリカ共同研究拠点
Latin American Collaborative Research Center
Newsletter No.31, September 2018

[発行日] 2018年9月30日

[制作] Latin American Collaborative Research Center
Tokyo Medical & Dental University
Clínica Las Condes

Lo Fontecilla 441, Las Condes, Santiago, Chile

Tel: (56-2) 2610 3780

Email: LACRC-CHILE.adm@cmn.tmd.ac.jp

Newsletter

No. 32 December 31 2018

東京医科歯科大学ラテンアメリカ共同研究拠点

チリに住んでみて

チリに赴任して4年が過ぎました。赴任当初は右も左も分からず、仕事も生活も手探りのような状態でしたが、色々な人に助けられ、また、自分自身でも色々な経験を積んでいくことで、今では、チリでの生活が我々の日常となり、全く特別なことではなくなりました。

日本とは異なる気候や風習、左ハンドル・右側通行といった日本と逆の交通ルールなど同様に、日本にはない不便さも日常となりました。その一つとして、「待たされる」ということに慣れてしまったような気がします。

チリでは、2-3週間の長期休暇が労働者の権利として認められています。そのため、特に、夏休み期間などでは、担当者がいないということで、長く待たされるのが頻繁にあります。

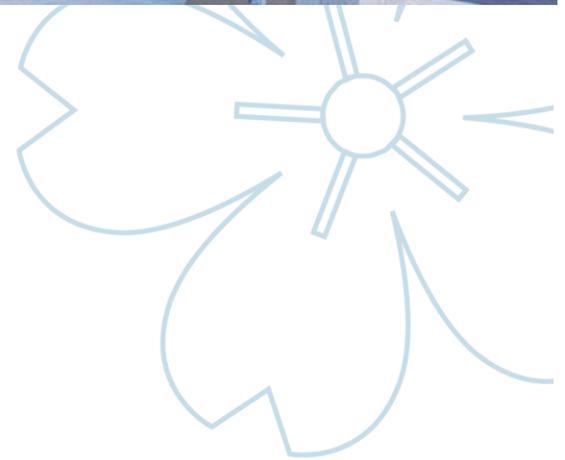
具体的には、郵便物がなかなか届かない、何かの手続きで連絡したが担当者が戻るまで進捗がない、医療の現場でいえば、病理等の検査結果のレポートがなかなか戻ってこない、検査や手術件数が通常時より減少する、などといったことが挙げられます。

日本のように、安定して同じサービスを提供できるということは素晴らしいことですが、その社会を維持するためには、個人に負担が強いられます。そして、その負担を社会のためと受け入れていると、「自分が無理したのだから、当然、相手にもそれを期待する」という考え方になってしまい、社会の不便さを許容できなくなるのではないかと思います。

便利な社会に越したことはありませんが、日本の社会が「ある程度の不便さ」を許容し、個人を尊重するようになったら、その許容が自分にもかえってきて、各自がゆとりを持った生活をする事が出来るのではないかと思います。

チリに住んでみて、日本より不便なことが多々ありますが、自分自身や家族を第一に考えるようになり、生活には日本では感じられなかったゆとりが持てるようになった気がします。

小田柿智之 消化器病態学分野



LACRC TMDU
IN CHILE
Latin American Collaborative Research Center
Santiago de Chile



Contents

ご挨拶	1
JDプログラム	2
PRENECの進捗状況	3
プロジェクトセメスター	4
活動報告	5

ジョイント・ディグリー・プログラム

ジョイント・ディグリー・プログラム(以下 JDP) では、12月から植竹宏之教授が責任者となり、加えて今後、指導教員とのコミュニケーションのサポートや学修相談を担う調整教員として新たに伊藤崇助教が選ばれました。

本号では、新たにJDPの調整教員としてメンバーに加わった伊藤助教からのお言葉を掲載しております。

JDP調整教員

JDP調整教員 伊藤 崇 助教

この度、JDPにおける調整教員を拝命いたしました。私は2010年4月末から約2年間にわたり、本学からの初の長期赴任者としてLACRCに赴任しました。当時PRENECは準備段階にあり、チリ大学とのJDPについては具体的な構想すら無く、赴任中はLACRCにおける研究環境の整備、PRENECにて使用される病理診断プロトコルの作成、CLCでの病理診断業務への参加などが主な活動となりました。日本とは異なる環境での業務や生活に戸惑うことも多々ありましたが、赴任を通じて大いに見聞を広げることができました。

調整教員としては、チリ赴任の経験を生かし、大学院生がJDPを通じて国際的医療人としての経験を積めるよう、微力ながらも大学院生の生活・研究のサポートに当たればと考えております。



PRENECの進捗状況

大腸癌早期診断プロジェクト(PRENEC)の最新情報をご報告いたします。

プンタ・アレナス、サンティアゴ、バルパライソ、バルディビア、オソルノ、コキンボの従来の6都市に加えて、コンセプションでPRENECが開始されました。しかしながら、バルパライソと、開始したばかりのコンセプションで、運営に関する問題が生じたため、現在、休止状態となっています。早期に問題が解決され、再開に向かうことが期待されます。国外パラグアイでは、PRENECのPilot studyが終了し、本格的な開始に向けて準備を進めています。

オソルノにおける研究会

11月29日～12月1日、PRENECの拠点の一つであるオソルノにおいてPRENECに関する研究会が行われました。プロジェクト責任者のロペス医師、ポンセ看護師とともに小田柿助教が招聘されました。

この研究会では、PRENEC開始から1年が経過したオソルノのPRENECに係わるスタッフを対象に行われました。一年間の結果の発表とともに、運用および臨床の面で生じてきた問題を取り上げ、解決に向けた話し合いをしました。小田柿助教は、内視鏡治療に関する発表を行い、現地の医師との意見交換をしました。

2017年に小田柿助教の指導のもと大腸内視鏡検査の研修を受けた、オソルノの拠点でPRENEC業務に携わっているクルス医師も、本研究会で発表をしました。このように我々の指導を受けた医師が各拠点に戻り活躍することは望ましい形であり、今後もPRENEC業務に係わる医師の育成に力を注いでまいります。



左より小田柿助教、オソルノPRENEC責任者のカセレス医師、ロペス医師



左よりカセレス医師、クルス医師

プロジェクトセメスター

10月31日、本学医学科4年次の学生を対象とした学生海外基礎医学実習(プロジェクトセメスター)で、6月よりチリ大学に派遣されていた2名の学生の最終発表会がチリ大学にて行われました。研究成果の発表だけでなく、チリの担当教官及び研究室スタッフからの質問にも英語で臨機応変に受け応えをし、担当教官等より高い評価を受けました。日本とは異なる環境で培った経験は、学生にとって将来の大きな糧となったでしょう。

最終発表会

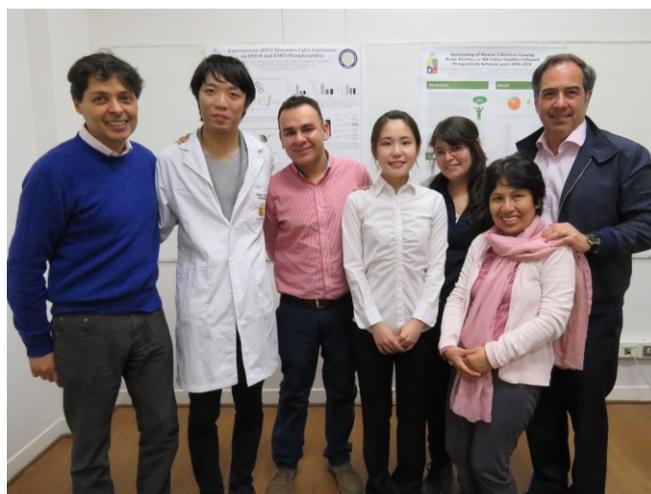
川上七海 チリ大学 感染症学研究室所属

9月ごろから急に時間の流れが早く感じるようになり、あっという間に帰国が迫ってきてしまいました。

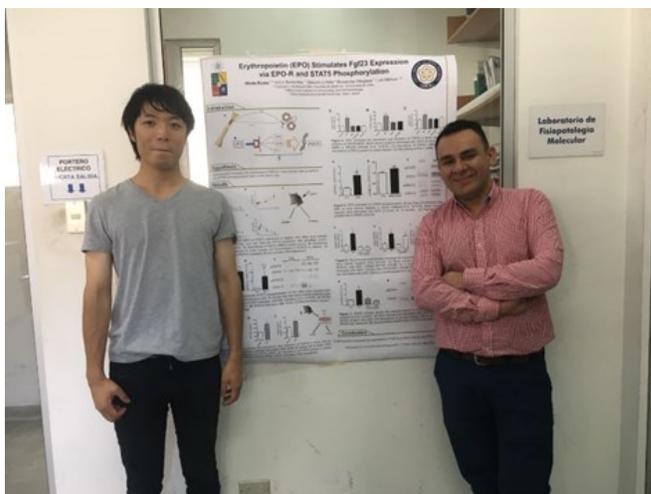
研究面ではノロウイルスのジェノタイプ分析の一連の作業を学び、RT-PCRやクローニングといった基本的な手技から結果の分析まで身につけることができました。研究経験が全く無い状態からのスタートで非常に不安でしたが、英語、スペイン語、時にはジェスチャーも交えつつ丁寧に説明していただけたおかげで理解しながら学ぶことができました。今回の研究の対象地域であるコロナという町にも連れて行っていただいて研究に協力してくださっている家族の方々との面接を見学し、自分が行っている研究がデータ上だけのことではないという実感を得られました。生活面ではスペイン語と英語でのコミュニケーションを取りつつこの機会が無ければ出会えなかったであろう友人たちと楽しい時間を過ごすことができました。温かく見守ってくださったオライアン先生、常に明るくかつ適切な指示や指摘でサポートしてくださった研究室の方々、今回の留学に関わるTMDU、チリ大学、LACRCスタッフの皆様のおかげで充実した5か月を過ごすことができました。本当にありがとうございました。

隈 宙音 チリ大学 腎臓病学研究室所属

こんにちは！チリ大学医学部腎臓病学研究室に派遣された医学科4年の隈宙音です。チリでの半年近い生活が終わったところです。初めての他家以外での暮らしや早すぎるチリのスペイン語など、はじめは不安だらけだったのですが、周りの方々が親切に助けて下さったおかげでなんとか過ごすことができました。一番大事な研究面でも努力した甲斐のある結果を出せてとても満足しています。スペイン語だけのコミュニケーションもできるようになり、渡航前とはどこか自分自身が変わった気すらしています。今まで支えてくださった方々に改めて感謝申し上げます。



お世話になった担当教官や研究室のスタッフ



研究を支えてくれたバリエントス研究員との記念撮影

LACRC活動報告

研究会における発表

10月26日、サンティアゴにおけるチリの癌研究グループGOCCHI (Grupo Oncológico Cooperativo Chileno de Investigación)の依頼を受けて小田柿助教がPRENECに関する発表を行いました。会場には公立・私立病院に所属するチリの癌研究に携わる医師等が参加し、現在、チリ各地で行われている大腸がん検診に高い関心が寄せられました。今後もこのような活動を通して、チリの医療に貢献できるように努めてまいります。



GOCCHI理事のミューラー 理事と記念撮影

**CURSO DE ACTUALIZACIÓN
EN EL MANEJO MULTIDISCIPLINARIO
DE TUMORES GASTROINTESTINALES**
(4 módulos: Agosto / Septiembre / Octubre y Noviembre 2018)

MÓDULO 1: Cánceres esofagogástricos y GIST
31 de agosto: 8:30 a 18.00 hrs. / 1 de septiembre: 9:00 a 13:00 hrs.
Auditorio Dr. Salvador Allende Colegio Médico,
Esmeralda 678, Santiago.

TEMAS:
Epidemiología de los cánceres digestivos en Chile
Etiopatología de los cánceres gástricos y esofágicos
Tratamientos uni- y multimodales en cánceres gástricos y esofágicos
Terapias de soporte
Biología molecular y perspectivas futuras
Impacto en salud pública de los cánceres esófago-gástricos
Los tumores del estroma gastrointestinal (GIST): diagnóstico y tratamiento
Casos clínicos

EXPOSITORES:

Invitado Internacional:
Dr. Guillermo Méndez (Hospital de Gastroenterología Dr. Borino Udaondo, Buenos Aires, Argentina)

Expositores Nacionales:
Dr. Carlos Rueda (Gastroenterólogo Oncólogo, Clínica Alemana de Santiago / Instituto Nacional del Cáncer)
Dr. Daniela Barahona (Radióloga, Clínica Alemana de Santiago)
Dr. Giancarlo Schiappacasse (Radiólogo, Clínica Alemana de Santiago)
Dr. Luis Aguilera (Endoscopista, Instituto Nacional del Cáncer)
Dr. Gonzalo Carrasco (Anatómopatólogo, Clínica Las Condes)
Dr. Tomoyuki Odagaki (Endoscopista, Profesor Asistente en el Latin American Collaborative Research Center (LACRC), Tokyo Medical and Dental University (TMDU))
Dr. Walter Medina (Cirujano Digestivo Oncólogo, Instituto Nacional del Cáncer)
Dr. Thiare Olguin (Nutrióloga, Instituto Nacional del Cáncer)
Dra. Claudia Acevedo (Psiquiatra, Instituto Nacional del Cáncer)
Dra. Verónica López (Oncóloga de Radioterapia, Instituto Nacional del Cáncer)
Dra. Bettina Müller (Oncóloga Médica, Instituto Nacional del Cáncer)
Kin. Karla Collao (Instituto Nacional del Cáncer)
Dra. Verónica Kramer (Especialista Cuidados Paliativos Oncológicos, Instituto Nacional del Cáncer)
Dr. Francisco Flores (Oncólogo Médico, Instituto Nacional del Cáncer)
Dr. Roberto Estay (Médico Internista, Colegio Médico)
Dr. Alejandro Corvalán (Investigador Traslacional, Pontificia Universidad Católica de Chile)

研究会プログラム

編集後記

真夏の乾いたサンティアゴの街やモールのいたるところでクリスマスツリーが飾られる時期となりチリの師走となりました。

PRENEC開始から現在までに患者登録数は3万人を超え、またそれに関連して今年初めてチリ人医師によるPRENECに関する論文が発表されました。様々な問題を抱えながらも少しずつ安定が見え始めた年でもあります。またJDPでは日本人大学院生が初めてチリに滞在し、チリ大学とともに挑戦の年となりました。新たに迎える年はプロジェクトの更なる発展と飛躍が期待されます。来年も本Newsletterを通してLACRCの活動を報告してまいります。(早川美貴)

東京医科歯科大学ラテンアメリカ共同研究拠点
Latin American Collaborative Research Center
Newsletter No.32 December 2018

[発行日] 2018年12月31日

[制作] Latin American Collaborative Research Center
Tokyo Medical & Dental University
Clínica Las Condes
Lo Fontecilla 441, Las Condes, Santiago, Chile
Tel: (56-2) 2610 3780
Email: LACRC-CHILE.adm@cmn.tmd.ac.jp

Newsletter

No. 33 March 31 2019

東京医科歯科大学ラテンアメリカ共同研究拠点

今夏の思い出

南半球に位置するチリは、日本と季節が逆で、12月～2月が夏になります。夏至に近い時期は21時過ぎまで明るく、勤務から帰宅してからも日中のような状況です。

私には小学一年生の長男がいるのですが、長男の通う学校にはプールがなく、通いやすいスイミングスクールもなかったため、殆ど泳ぐことができませんでした。日本では体育の授業に水泳があるので、チリにいる間に多少は泳げるようにしてあげたいと思い、「泳げるようになること」を長男との今夏の目標に掲げました。幸いにも、我々の居住地区のマンションの大半がそうであるように、我々のマンションにもプールがついていたため、週末を中心に、余裕があるときは、平日の帰宅後にも長男の水泳の練習に付き添いました。

私自身は、ある程度は泳げるのですが、教えるとなると手順が分からなかったため、Youtubeで教え方の動画を探して、長男と一緒に研究しながら、その日の課題を決めて練習を繰り返しました。長男の泳いでいる姿を動画にとって良い点、悪い点を確認したり、上手な人の動画を探して何が違うのかを研究したりもしました。

この夏の頑張りによ、蹴伸びがなんとかできる程度であった長男が、大分上達して、プールを怖がらずに泳ぐことを楽しめるようなレベルになりました。課題を決めて一歩一歩クリアしていったことで、練習の成果が実感でき、泳ぐのが楽しくなってきたことが、上達の要因だったと思います。

ここで、私のチリでの業務に触れさせて頂きますが、主な業務は研修医師に大腸内視鏡検査・治療の指導をすることです。殆どの研修医師が初心者であるため、まずは、基本となるストラテジー、技術を教えて、繰り返し練習させて、3ヶ月の研修期間終了後に一人で大腸内視鏡検査を実践することが出来るようなレベルに達することを目標としています。

対象者や指導内容は全く異なりますが、長男の水泳も内視鏡の研修も、何かを習得する時の過程というのは非常に似ているなと思いました。

2019年度も定期的に大腸内視鏡の研修医師を受け入れる予定ですし、プライベートでも長女の縄跳びや、次女の自転車など、子ども達と一緒に取り組みたいことが沢山あります。

子ども達の成長は勿論のことですが、異国で他者の成長に関与できることも私にとっては非常に嬉しいことで、こういった機会を与えられていることに大変感謝しています。

2019年度のチリ拠点の活動、及び、我々家族のチリ生活が充実したものになることを祈念し、本巻頭言を締めさせていただきます。

小田柿 智之 消化器病態学分野



LACRC TMDU
IN CHILE
Latin American Collaborative Research Center
Santiago de Chile



Contents

ご挨拶	1
JDプログラム	2
PRENECの進捗状況	3
安野特命教授チリ訪問	4
活動報告	5

ジョイント・ディグリー・プログラム

本年3月に昨年同様プログラムの総括を行うため医学部長会議を行いました。本号では会議の概要をお伝えいたします。

JDP医学部長会議の開催



JDP 医学部長会議の様子

3月28日に本学及びチリ大学の学部長及び教授で構成する学部長会議をテレビ会議システムにて開催しました。

本会議では2018年度におけるジョイント・ディグリー・プログラム（以下JDP）の総括、自己点検・評価報告書について報告及び協議を行いました。

チリと日本では12時間もの時差があるため、本会議は年1回の開催としておりますが、両大学の学部長が顔を合わせて協議する場を設けることは大変貴重な機会です。

引き続きプログラムが充実したものとなるように両大学が協力をして運営を進めて参ります。

松宮医師の帰国

松宮 由利子

東京医科歯科大学・チリ大学国際連携医学系専攻

時の流れは早いもので、チリへ昨年度3月に降り立ってからあっという間に一年が経過し、今年の春は日本で迎える事となりました。桜の満開を日本で迎えられる事が楽しみであるとともに、チリにおける1年間がかけがえのない時間であっただけに残念な気持ちもあります。チリでは、チリ大学とクリニカ・ラス・コンデスの協力を得て、基礎研究に必要な分子細胞生物学・細菌学・遺伝子学などをチリ大学大学院の学生と共に学ぶとともに、チリにおける臨床の実態を肌で感じて参りました。殊に、チリでの貧富や地域による医療格差を目の当たりし、改めて日本の医療のあり方を考えるよい機会となりました。ここで得た知識が早期がんの発見および予防医学分野の発展に役立てるよう引き続き精進していきたいと考えております。

このJDPが多くの人に支えられている事を感謝し、また、引き続きチリとよい関係を維持するべく、成果を残したいと思っております。



研究室スタッフとの写真

PRENECの進捗状況

大腸癌早期診断プロジェクト(PRENEC)の最新情報をご報告いたします。

プンタ・アレナス、サンティアゴ、バルパライソ、バルディビア、オソルノ、コキンボの6都市に加えて、コンセプションでPRENECが開始されました。しかしながら、バルパライソと、開始したばかりのコンセプションで、運営に関する問題が生じたため、現在、休止状態となっています。早期に問題が解決され、再開に向かうことが期待されます。国外パラグアイでは、PRENECのPilot studyが終了し、本格的な開始に向けて準備を進めています。

PRENEC進捗報告

コキンボ ●

サン・パブロ病院
開始時期: 2016年4月

サンティアゴ① ●

サン・ボルハ病院
開始時期: 2013年6月

バルパライソ ●

ペレイラ病院
開始時期: 2012年6月

コンセプション ●

グラント・ベナベント病院
開始時期: 2018年2月

バルディビア ●

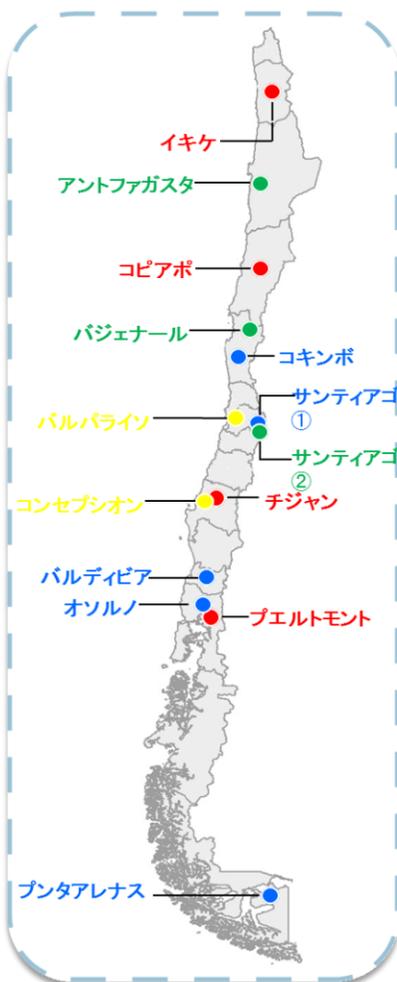
バルディビア病院
開始時期: 2016年12月

オソルノ ●

サン・ホセ病院
開始時期: 2016年12月

プンタ・アレナス ●

マガジャネス病院
開始時期: 2012年5月



アントファガスタ ●

グスマン病院
2016年1月 調印

バジェナル ●

ウワスコ病院
2016年5月 講習会参加

サンティアゴ② ●

国立がん研究所
2016年1月 調印

● 稼働中

● 再開に向けて準備中

● 講習会参加・調印済み

● 参加予定

イキケ ●

イキケ病院

コピアポ ●

サン・ホセ・デ・カルメン病院

チジャン ●

エルミンダ・マルティン病院

プエルト・モント ●

プエルト・モント病院

安野特命教授チリ訪問

3月3日～3月19日にかけて安野正道特命教授がチリにおける外科分野の臨床指導及び講演の目的でチリを来訪しました。本号ではその様子をお伝え致します。

臨床指導及び講演

サンティアゴ市内のマイブ区にあるエル・カルメン病院にて、安野特命教授が現地医師を対象に手術及び臨床指導にあたりました。手術では上行結腸癌（後腹膜浸潤高度、巨大肝膿瘍合併）の患者の拡大結腸右半切除及び肝膿瘍開放ドレナージ術に第一助手として入り、執刀していた現地医師に指導をしました。

さらに、同病院に来ているフィニス・テラエ大学の外科インターンシップ学生及び臨床実習生等に、肛門疾患全般の講義、消化管悪性腫瘍の外科治療についての動画を含む講義を行うとともに、本学やJDPIに関する紹介を行いました。

また、CLCでは、キャンサーボードやカンファレンスに参加し、毎月開催されているPRENEC定例会議及び症例検討会にて、直腸癌外科治療についての発表を行いました。

これらの活動を通して日本の消化器癌診療における優れた知識と技術をさらに広めることとなりました。



フィニス・テラエ大学の学生に講義を行う安野特命教授

JICA訪問



左より安野特命教授、JICAチリ半谷支所長、小林支所長代理

3月11日、安野特命教授がJICAチリ支所の半谷良三所長、小林としみ所長代理を表敬訪問しました。

本学のチリ関連事業、主にJDP、PRENEC、プロジェクト・セメスターに関しての今までの経緯と現状、また今後の展望のご説明を行い、これからも変わらず、本学の活動における御協力と御支援を依頼しました。

LACRC活動報告

一時帰国報告



左より吉澤学長、小田柿助教

LACRCの小田柿助教の一時帰国に合わせて、1月23日にPRENEC・JDP 合同会議が行われました。本学からは、田賀哲也副学長、植竹宏之教授、岡田卓也講師、片山智弘課長が参加しました。小田柿助教が、PRENECの進捗状況やサン・ボルハ病院での臨床活動、2018年度のプロジェクト・セメスターに関する報告等を行い、今後の展開について協議しました。同会議に参加できなかった北川昌伸拠点長には、1月28日に同様の報告を行いました。

また、2月6日には、吉澤靖之学長へ2018年度のチリでの活動を報告し、学長より激励のお言葉をいただきました。

編集後記

文部科学省研究留学生制度にて、本年4月より京都大学大学院 人間・環境学研究科へ留学することとなりました。

LACRCでの約2年間は、いろいろな事がありましたが、多くの経験をさせていただき、皆様には大変お世話になりましたこと感謝申し上げます。

今後、日本で更なる経験を積み、また将来お目にかかれることを楽しみにしております。(マルガリータ・バルハ)

東京医科歯科大学ラテンアメリカ共同研究拠点
Latin American Collaborative Research Center
Newsletter No.33 March 2019

[発行日] 2019年3月31日

[制作] Latin American Collaborative Research Center
Tokyo Medical & Dental University
Clínica Las Condes

Lo Fontecilla 441, Las Condes, Santiago, Chile

Tel: (56-2) 2610 3780

Email: LACRC-CHILE.adm@cmn.tmd.ac.jp

Newsletter

No. 34 June 30 2019

東京医科歯科大学ラテンアメリカ共同研究拠点

チリの大気汚染

6月に入り、大分冷え込む季節となってきました。以前のNewsletterでもお伝えさせていただいたように、サンティアゴは周囲が山脈に囲まれた盆地であることから、毎年冬になると光化学スモッグが発生し、深刻な問題となっています。

本巻頭言を書くにあたり、南米の大気汚染の状況について調べてみたのですが、「南米大気汚染ランキング(都市別)」でTop10のうちリマ(ペルー)を除く9都市がチリからの選出となっていました。サンティアゴも6位にランキングしていたのですが、上位5都市はいずれもチリ南部の都市でした。サンティアゴのような首都圏に比べると、人口が多いわけでもなく、自然も豊かで雨も多い地域であるにもかかわらず、大気汚染ランキングの上位を占めているのは、チリ南部の人々の生活習慣に関係があります。

チリ南部では、昔から暖房器具、調理器具として薪を使用しており、今もその風習が続いています。日本では、暖炉で暖を取ることは贅沢な印象があるかもしれませんが、チリでは、むしろ薪の方が安価であるため、生活スタイルを変えない家庭が多いのが現状です。また、1位(パドレ・ラス・カサス)、5位(テムコ)の都市があるアラウカニア州は、チリで最も平均所得の低い地域であり、そういった経済状況も薪の使用規制が徹底できない理由の一つになっています。

一昨年の冬に、テムコへ出張に行ったのですが、空港に降り立つや否や、たき火のような臭いがあたり一面に立ち込めていました。空港からホテルに向かう車内から見た大部分の家には煙突があり、下記の写真のような状況だったことを記憶しています。

チリ環境省は、2017年度より、本格的に車両規制、薪の使用規制、工場の操業規制、山火事対策、植林計画等の大気汚染対策(PPDA: Los Planes de prevención y/o descontaminación atmosférica)に取り組んでいます。上述したように、生活習慣や経済格差なども大気汚染と関連しており、多方面からのアプローチが必要だとは思いますが、こういった政策が実を結び、少しずつでも、チリの大気汚染が改善していくことを切に願っています。

小田柿智之 消化器病態学分野

南米大気汚染ランキング(都市別)

1. Padre las Casas (Chile)
2. Osorno (Chile)
3. Coyhaique (Chile)
4. Valdivia (Chile)
5. Temuco (Chile)
6. Santiago (Chile)
7. Lima (Perú)
8. Linares (Chile)
9. Rancagua (Chile)
10. Puerto Montt (Chile)

Diario Uchile参照:

<https://radio.uchile.cl/2019/03/06/ciudades-chilenas-son-las-mas-contaminadas-de-sudamerica/>



LACRC TMDU
IN CHILE
Latin American Collaborative Research Center
Santiago de Chile



Contents

ご挨拶	1
JDプログラム	2
PRENECの進捗状況	3
プロジェクトセメスター	4
活動報告	5

ジョイント・ディグリー・プログラム

本年6月に本プログラムの第1期生及び第2期生の2名が、チリから来日しました。今回の訪問は、半年以上に渡る本学での学修に向けた事前訪問であり、本学の学修環境の確認や、論文作成に向けた本学の指導教員との打ち合わせが行われました。

第1期生及び第2期生の来日

本年6月9日から24日まで本プログラム第2期生であるラファエル・サナブリア医師が来日しました。指導教員の植竹教授からの指導のみならず、肝胆膵外科学分野等の協力を得て、手術見学や研究室の教員等との論文作成に向けた発表及びディスカッションが行われました。

続けて、6月23日から29日には、第1期生のディエゴ・サモラーノ医師が来日し、来年度に本学で履修する臨床科目の内容や論文作成に関して、指導教員との話し合いの場がもたれました。

短い滞在ではありましたが、両者ともに、本学での学修の前に、非常に良い準備が出来ました。

また、サナブリア医師は、滞在期間中に本学の留学生と親睦を深める機会を持つことができ、日本の滞在を楽しんでいました。

引き続き学生が円滑に学修を進められるよう協力して参ります。



肝胆膵外科メンバーとサナブリア医師



指導教員の植竹教授と留学生との親睦会

PRENECの進捗状況

大腸癌早期診断プロジェクト(PRENEC)の最新情報をご報告いたします。

プンタ・アレナス、サンティアゴ、バルパライソ、バルディビア、オソルノ、コキンボの6都市に加えて、コンセプションでPRENECが開始されました。しかしながら、バルパライソと、開始したばかりのコンセプションで、運営に関する問題が生じたため、現在、休止状態となっています。早期に問題が解決され、再開に向かうことが期待されます。

また、本年6月に、チリ北部の都市アントファガスタで、PRENECを展開するための啓発活動を行いました。本号ではその様子をお伝えします。

アントファガスタにおける啓発イベント

6月20、21日の2日間、チリ北部にある第2州のアントファガスタにて、クリニカ・ラス・コンデス(以下CLC)主催のがん啓発イベントが開催されました。CLCよりロペス医師、サラテ医師、ポンセ看護師等が参加し、現地の医師、看護師、医学生等への最近の知見を共有する為の勉強会に加え、市民を対象に巨大結腸コロモデル、巨大肺モデルを設置し、大腸がん、肺がん、乳がん、遺伝性のがんに関する情報提供を行いました。

同市のグスマン病院では、PRENECに関する調印が2016年に締結されPRENECの開始が秒読みとなっていたところ、予算の問題により開始が遅延していました。今回の啓発イベントがきっかけとなり、PRENECの開始準備が進むことが期待されます。



勉強会の様子



市民対象の啓発イベントの様子

プロジェクトセメスター

本学は、2010年から学生海外基礎医学実習(プロジェクトセメスター)の目的で、医学科4年生を約4~6カ月に渡ってチリの研究施設に派遣しています。今年度も2名の学生がチリ大学の研究室に所属し、6月初旬より研究に取り組んでいます。本号ではそれぞれの学生のプロジェクトセメスター期間中の抱負をお伝え致します。

学生の抱負

澤口圭宏 チリ大学 感染症分野所属

こんにちは、澤口圭宏(さわぐちよしひろ)と申します。研究室の方に「よして呼んでね!」と伝えましたが、どうしても「よち」になってしまい言語の壁を感じています。

研究内容をお話する前に、みなさん胃腸炎についてご存知でしょうか?胃腸炎の年間のべ患者数は約45億人、死者数は約166万人にまでのぼり、その多くが5歳未満の小さい子供です。そんな恐ろしい胃腸炎の原因となりうるものにノロウイルスとアストロウイルスがあります。私はこの2種類のウイルスの型の解析(ゲノマイピング)を行なう研究をしています。

現在、研究室ではスペイン語:英語=1:1というルー大柴のような会話をしていますが帰国時には1:0となるよう、スペイン語の勉強も合わせて頑張りたいと思います。そして、本留学はLACRCやチリ大学をはじめとして多くの方々のサポートのもと実現していることに感謝を忘れず、実りのあるものにできるよう励んでまいります。



宿泊先のベランダから見た光景

原田大輝 チリ大学 認知神経科学分野所属

医学科4年生の原田大輝と申します。到着してからはしばらくは生活基盤を整えるのに苦労しましたが、今ではだいぶ落ち着き楽しむことができます。

こちらではNeurosistemasという研究室に所属しております。脳の行動制御や知覚のメカニズムなど認知神経科学というカテゴリで幅広い分野が存在し、例えばラット実験、人体試験、コンピュータ上での神経ネットワークシミュレーションなどがあります。様々な分野に携わるメンバーと話合いながら、詳細なプロジェクトを決めることが最初の課題でしたが、どうやら脳のシミュレーション、モデリングのテーマに落ち着きそうです。はじめ一ヶ月ほどは、関連テーマの論文や必要なプログラミング技術などを身につけ基盤を整える時期です。メンバーみなさん本当に親切で、工作中、放課後なども非常に頼りになる上、楽しませてもらっています。研究とスペイン語バランスよく進めていけるよう、なるべく規則正しい生活を心がけたいと最近思っています。

最後に、現地スタッフ、ラボメンバー、担当教授Pedro Maldonadoに大いなる感謝を述べて終わりたいと思います。これからもよろしく願い申し上げます。



世界遺産バルパライソにあるストリートアート

LACRC活動報告

チリ南部における胃がん検診プロジェクト

例年開催されている、チリ内視鏡学会主催の胃がん検診プロジェクトが、4月16日からチリ南部の都市（クラニラウエ、ピトルフケン、ビクトリア、インペリアル）で行われました。内視鏡技術指導者として、日本から招聘された内視鏡医（神戸大学の石田司医師等）と共に、小田柿助教が4月22日から25日の期間にクラニラウエの病院に招聘されました。

このプロジェクトでは、チリにおける胃がんの疫学調査や、新たなバイオマーカーの検出などの臨床研究に加えて、チリ南部の内視鏡の待機患者を解消する目的もあります。チリの地方都市では、病院の設備や内視鏡医の不足により、内視鏡検査が数年待ちの状況です。

同病院でのプロジェクトは、2週間にわたって行われ、計200人の患者が対象になりました。普段なら、5か月間近くかかってしまう検査数を2週間でこなすこととなり、クラニラウエの待機患者の解消に大きく貢献しました。



病院スタッフとの記念撮影



左より小田柿助教、神戸大学の石田医師、ホルケラ医師、ドノソ医師、カルファグニニ医師

編集後記

「何処へ行っても、自分の家ほど良い所はない」と言われますが、確かにそう考えます。日本で体調を崩し、チリに戻ってから6ヶ月間、私の健康の回復に専念してきました。約2年間の休職後、再度、本学の皆様と一緒に働くことができることが大変嬉しく、心より感謝申し上げます。今後は皆様のお仕事のお力になれますよう、より一層精進しますので、何卒これからも宜しくお願い致します。（ハイメ・ウレホラ）

東京医科歯科大学ラテンアメリカ共同研究拠点
Latin American Collaborative Research Center
Newsletter No.34 June 2019

〔発行日〕2019年6月30日

〔制作〕Latin American Collaborative Research Center
Tokyo Medical & Dental University
Clínica Las Condes
Lo Fontecilla 441, Las Condes, Santiago, Chile
Tel: (56-2) 2610 3780
Email: LACRC-CHILE.adm@cmn.tmd.ac.jp



Newsletter

No. 35 September 30 2019

東京医科歯科大学ラテンアメリカ共同研究拠点

学生時代を振り返って

本学には、4年次の学生海外基礎医学実習(プロジェクトセメスター)と6年次の海外臨床実習(Overseas Clinical Experience)という留学プログラムがあります。チリニュースレターでも紹介していますが、チリ大学にもプロジェクトセメスターとして2名の学生を派遣させて頂いています。

LACRC拠点員としてチリに赴任しているため、本学からの学生らと交流することがありますが、彼らの臨床や基礎研究への考え方や将来に向けての展望などを伺うと、いつも意識の高さに驚かされます。私の意識が低かったこともあるのですが、自分が彼らと同じ学年だった頃は、先のことを漠然と考えることはあったかもしれませんが、進級するためだけに授業や実習をこなしていたような記憶があります。

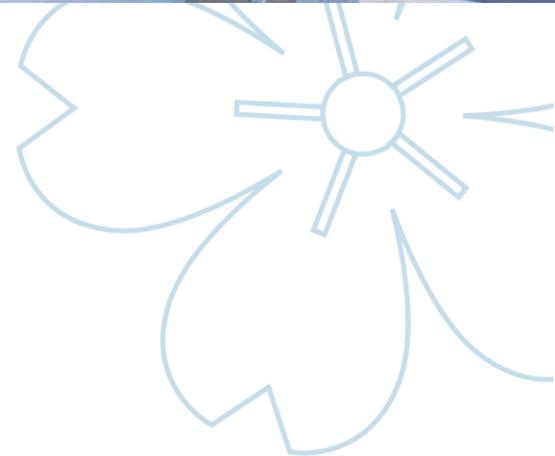
私は2003年に本学を卒業しましたが、在学中には現在のような留学プログラムはありませんでした。また、卒業した年はスーパーローテーション(現在の2年間の初期臨床研修制度)が始まる前年であったため臨床研修マッチング制度もありませんでした。身近な先輩や同級生の殆どが本学のいずれかの医局に所属するような時代でした。

全員が興味をもっているわけではないでしょうが、学生のモチベーションを高めるような留学プログラムや、希望の研修先に入るための臨床研修マッチング制度が目前にあれば、他者との競争があり大変でしょうが、自分の将来のことや目指す方向性などについて自然と考えるようになり、学生のうちから色々な準備が出来るようになるのではと思いました。

私自身が学生だった当時は、実習や試験、部活、バイトなどで忙しくしているように思っていたのですが、卒業して働き始めてからの方が遥かに忙しいです。家庭を持つようになると自分のためだけに使える時間は限られていきます。

学生のうちに多くのことを経験して、広い視野を持つことは、将来にとって必ずプラスになると思います。本学から幅広い分野で活躍する人材が育っていくことを祈念し、本巻頭言を締めさせていただきます。

小田 柿 智之 消化器病態学分野



LACRC TMDU IN CHILE
Latin American Collaborative Research Center
Santiago de Chile



Contents

ご挨拶	1
JDプログラム	2
PRENECの進捗状況	3
プロジェクトセメスター	4
活動報告	5

ジョイント・ディグリー・プログラム

ジョイント・ディグリー・プログラム(以下JDP)の2019年度10月入学の試験が、9月に本学及びチリ大学合同の学術委員会により行われ、第四期生となる学生が一名選出されました。本号ではこの学生の入学への思いを掲載しています。

2019年度10月入学JDP学生の決定

カルラ・アレサンドラ・カサーナ・アバド医師

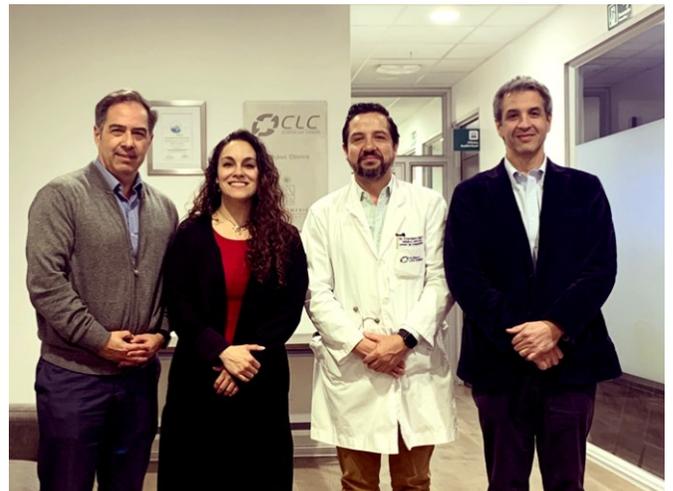
この度、JDPへの入学が正式に決まり、大変光栄に思っております。本プログラムへの入学により、高度な専門技術を習得し、臨床、主に外科の分野を強化できる大変貴重な機会となると確信しております。

大腸がんは、世界的にみても主な死因の一つで、大きな社会問題ですが、これに集学的なアプローチで診断・治療をするためには、高度な知見が求められます。



また、優秀な外科医となる為には、臨床のみならず研究に関してもしっかり学ぶ必要があると考えています。

チリ大学、東京医科歯科大学及びクリニカ・ラス・コンデス(以下CLC)間における、この国際的なプログラムは、大腸病変の早期診断及び、適切な治療を行う上で、非常に有益なものだと信じております。このプログラムにより必要な知識を身につけ、社会に貢献できればと考えております。



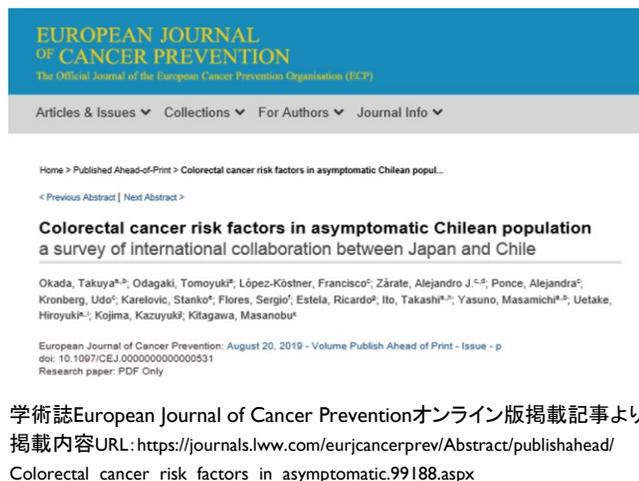
入学試験後の様子
(左よりオンライン教授、カサーナ医師、ロベス准教授、トレス准教授)

PRENECの進捗状況

大腸癌早期診断プロジェクト(PRENEC)の最新情報をご報告いたします。

プンタ・アレナス、サンティアゴ、バルパライソ、バルディビア、オソルノ、コキンボの6都市に加えて、コンセプションでPRENECが開始されましたが、バルパライソとコンセプションで運営に関する問題が生じたため、現在、休止状態となっています。国外ではパラグアイにおいて、PRENECのPilot studyが終了し、本格的な開始に向けて準備を進めています。

元チリ拠点派遣教員による論文の掲載



The screenshot shows the abstract page of a research paper. The journal title is 'EUROPEAN JOURNAL OF CANCER PREVENTION'. The article title is 'Colorectal cancer risk factors in asymptomatic Chilean population a survey of international collaboration between Japan and Chile'. The authors listed are Okada, Takuya^{a,*}, Odagaki, Tomoyuki^b, López-Köstner, Francisco^c, Zárate, Alejandro J. ^{c,d}, Ponce, Alejandra^e, Krenberg, Udo^f, Karelovic, Stanko^g, Flores, Sergio^h, Estela, Ricardo^g, Ito, Takashi^{a,*}, Yasuno, Masamichi^{a,*}, Uetake, Hiroyuki^{a,*}, Kojima, Kazuyukiⁱ, Kitagawa, Masanobu^a. The publication date is August 20, 2019. The URL for the abstract is https://journals.lww.com/eurjncancerprev/Abstract/publishahead/Colorectal_cancer_risk_factors_in_asymptomatic.99188.aspx.

本年8月20日、LACRCの前赴任者である本学の岡田卓也特任講師(統合国際機構 グローバル企画・推進部門所属)による論文「Colorectal cancer risk factors in asymptomatic Chilean population a survey of international collaboration between Japan and Chile」が学術誌、European Journal of Cancer Prevention 誌に掲載されました。

本研究では、2012年から2017年までのPRENEC参加者23,845名のデータから症例対照研究を行い、チリ人における大腸がん発症の危険因子を分析しました。その結果、男性、高年齢、食物繊維摂取量が少ないグループでは大腸がんの発症率が有意に高いことが明らかになりました。また高血圧や糖尿病を有するグループや、アルコール・肉類の摂取量が多いグループも発症率が高くなる可能性が示されました。これらの成果より、チリの大腸がんの一次予防に繋がることが示唆されました。PRENEC責任者であるロベス医師やプロジェクトに係わるチリ人医師からも、これらを大いに活用し、更なる大腸がん予防につなげたいとコメントがありました。

PRENEC拠点長会議



拠点長会議の様子

7月25日、CLCで開催された国際シンポジウム、がん研究所開所式のイベントに合わせて、PRENECの各拠点長が集まり、会議が開かれました。

本会議では、PRENECの運営に関して話が進められました。各拠点での問題点、円滑に運営を進めるための対策など、それぞれの拠点での経験をもとに活発な協議が行われました。

今後の運営に反映され、順調に展開されることが期待されます。

プロジェクトセメスター

本学は、2010年から学生海外基礎医学実習(プロジェクトセメスター)の目的で、医学科4年生を約4~6カ月に渡ってチリの研究施設に派遣しています。今年度も2名の学生がチリ大学の研究室に所属し、6月初旬より研究に取り組んでいます。本号ではそれぞれの学生体験記をお伝え致します。

学生体験記

澤口圭宏 チリ大学 感染症分野所属

21.これはスペイン語を公用語としている国の数だそうです。チリもそのような国々のひとつになります。しかし、一口にスペイン語といっても国ごとに個性が存在しています。チリは特に独特なようで、チリ人にスペイン語について尋ねると、“Los Chilenos hablan mal (チリ人の話すスペイン語はひどい)”と言われます。ところがとても興味深いことに、チリ人は総じてこのことを嬉しそうに話すのです。どうしてそんなにも嬉しそうなのか。そんな疑問を抱えたまま、先日ペルー・ボリビア・チリと3カ国をまたぐ旅行をしてきました。

ペルーやボリビアはゆっくりと綺麗に発音するためとても聞き取りやすいのが特徴です。そんな聞き取りやすいスペイン語に感動しながら旅をすすめていたある日、近くから現地の人とは違うスペイン語が聞こえてきました。もしやと思って話しかけてみるとチリの方で、会話の中ではやはり嬉しそうにチリのスペイン語について語っていました。そのとき気づいたことは、チリ人にとってチリのスペイン語は大事なアイデンティティだということでした。日本で関西の方が関西弁に誇りを持っているように、チリ人も多くのスペイン語圏の中でチリのスペイン語を大事にしていたのです。

そのような発見があった先日の旅行ですが、気が付けば残りのチリ生活も約1ヶ月となってしまいました。最後まで最大限の経験をできるように頑張っていきたいと思います。



ボリビアのウユニ湖にて

原田大輝 チリ大学 認知神経科学分野所属

早くも3カ月以上が経過し、この研究期間も折り返し後半となりました。9月は連休が続く上、旅行の予定もかなり入っているので今回は8月までを振り返ってみます。

研究は毎週の議論、毎日の論文検索・紐づけ、神経モデルの更新、また、関連知識の獲得を行ってきました。大体のプログラミングは終了したので、最近はこの研究期間での着地点や次のステップを議論したり、ポスターや論文形式の記録をとったりしています。今年から始まったプロジェクトなので帰国後も取り組むことになりそうです。陽気なラボメンバーとも結構仲良くなることができ、毎週なにかしらイベントやパーティーを楽しむことができました。アメリカからの短期留学生が帰国するなど、様々な交流関係の変化がありました。どの部分でもよい方向に向かっていっていると感じています。最近トルコから来たメンバーと仲良くなり、9月末にはペルーで1週間ほど旅行する予定です。生活面では一時期体調が優れなかったのですが、積極的に温かい飲み物を摂取したり、十分な睡眠をとることで回復してきました。今後も研究はできる限りハードに、他はこちらのペースの合わせる感じで精進して参ります。



8月末の慰労会@Pedro教授の別荘に向かう際のベストショット

LACRC活動報告

国際シンポジウムへの参加



開所後の様子(左よりCLCがんセンター創始者のアセド医師、ロベスがん研究所所長、チョマリ院長、ナバリ理事長)



オソルノのPRENEC拠点長であるカセレス医師(右)と記念撮影

7月25・26日、ブラジルのALBERT EINSTEIN病院とCLC合同で行われた国際シンポジウムH-ONCOSURがCLCにて開催されました。同シンポジウムで、小田柿助教が早期大腸がんの内視鏡治療に関する発表を行いました。

また、このシンポジウム内で、CLCに開設されたがん研究所(※)の開所式が行われました。PRENECの責任者であるロベス医師は、がん研究所の所長に就任しており、冒頭の挨拶で、がん研究所開設に至る歴史の中で、PRENECに関する紹介があり、本学とのつながりが重要であったことを強調していました。

※2019年7月より既存のCLCがんセンターは、CLCがん研究所へと名称が変更されました。



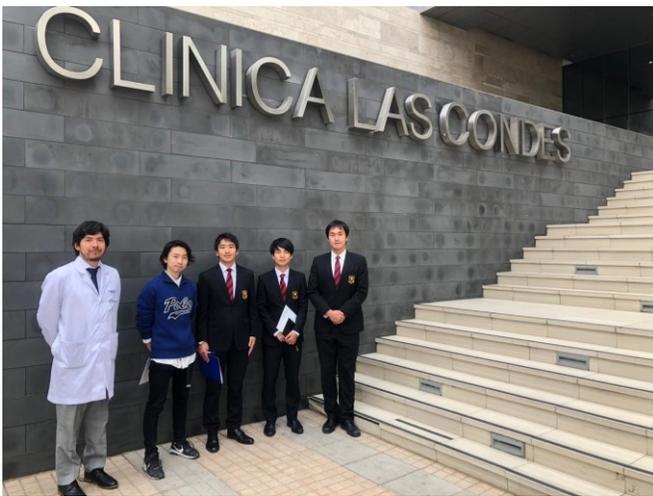
発表会場入り口にて

慶應義塾大学学生団体の訪問

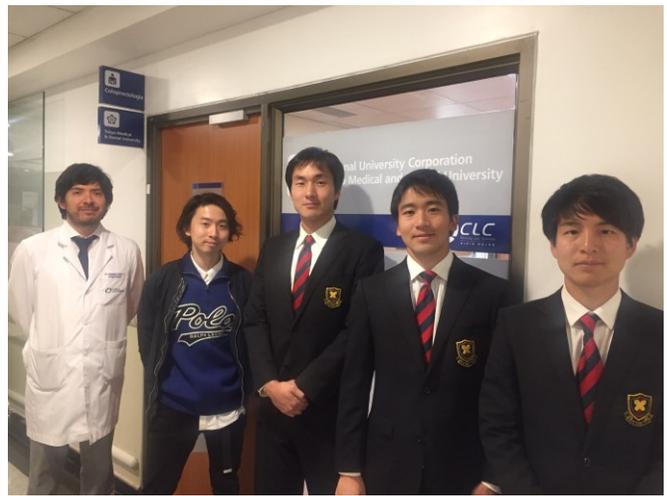
慶應義塾大学国際医学研究会(IMA)の学生らが、日本の夏季休暇を利用して南米の様々な都市の医療施設等の見学をしており、その一環として、チリでの遠隔医療の現場を調査するためにサンティアゴを訪れました。

本学の海外拠点があることから、8月21日に施設見学の目的でCLCに訪れました。現在、チリに留学中の本学のプロジェクト・セメスターの学生も参加し、サラテ医師の案内のもと各部署を回りました。

短い訪問でしたが、CLCの施設だけでなく本学のプロジェクト及び、LACRCオフィスを知っていただく良い機会となりました。



CLC玄関前



LACRCオフィス前にて

編集後記

先日チリのピネラ大統領が2020年度予算について言及し、保健省には今年度比5.7%増の予算を盛り込む見込みであると発表しました。これにより公立病院や保健所の設備改善、公的保険(FONASA)に加入する患者の負担額軽減、専門性の高い医師の育成をにかけています。本学が関わるPRENECは公的保険の加入者を対象としている為、この政策が、PRENECにも良い結果をもたらすことを期待しております。

今後もNewsletterを通してチリの様子をお伝えしてまいります。(早川美貴)

東京医科歯科大学ラテンアメリカ共同研究拠点
Latin American Collaborative Research Center
Newsletter No.35 September 2019

[発行日] 2019年9月30日

[制作] Latin American Collaborative Research Center
Tokyo Medical & Dental University
Clínica Las Condes

Lo Fontecilla 441, Las Condes, Santiago, Chile

Tel: (56-2) 2610 3780

Email: LACRC-CHILE.adm@cmn.tmd.ac.jp

Newsletter

No. 36 December 31 2019

東京医科歯科大学ラテンアメリカ共同研究拠点

チリ拠点OBから見た東京医科歯科大学の海外拠点雑感



皆さまご無沙汰しております。2013年から2015年にチリ拠点に赴任していた岡田卓也です。帰国から早くも5年弱が経過しました。2019年8月より統合国際機構の教員として、また同時に医学部附属病院国際医療部の部長として、教育・研究・医療の多角的視野から東京医科歯科大学のグローバル化を推進する業務に携わっております。

本学には3つの海外拠点があります。南米チリ、アジアのタイ、そしてアフリカのガーナです。いずれも、それぞれの国と本学との長い協力関係と交流により築かれた相互理解に基づき連携をさらに深めるため、文字通り拠点となりました。これらの

海外拠点では、現地の医歯学系施設と共同で研究を行ったり、本学学生の留学を受け入れたりしています。

さて、私は統合国際機構に着任して最初の海外ミッションとして11月にガーナ拠点に出張に行って参りました。拠点の皆様と今後の活動を推進するための意見交換はもちろんのこと、ガーナで開かれた「日本留学フェア」に参加して東京医科歯科大学のプレゼンス向上と留学生の呼び込みを図る目的での訪問です。東京からガーナの首都アクラまでは飛行機だけでも約20時間、チリ拠点で慣れていたとは言えやはり長い道のりでした。

ガーナ拠点には現在、林隆也特任講師が駐在派遣され、野口記念医学研究所で熱帯性疾患の原因ウイルスに関する研究や人材育成を行っています。林先生のおかげで出張中も安心して過ごすことができました。同じ拠点経験者ならではの話で盛り上がり、お互いの困ったことや大変だったこと、プロジェクトセメスターの学生の研修のことを共有するのは、私には貴重な時間でした。林先生には残りの任期も安全無事に過ごしていただけるようお願いばかりです。

チリの場合もそうでしたが、ガーナでも行く場所や時間帯、移動手段さえ間違えなければ危険な目に遭遇する機会は少なく、日本人も問題なく暮らしているようです。出張中は日本大使館の方々にもお会いし、アフリカでは比較的治安の良い国で、学術交流を通じて双方の発展が見込めるとおっしゃっていました。チリもガーナも日本にいとあまり情報が入ってこないためイメージが先行しがちですが、拠点の活動や学生交流を通じて相互理解を深め、馴染みのない方々にもそれぞれの良さを知っていただければ、さらに海外拠点の活動も盛り上がってくれることと思います。



統合国際機構 岡田卓也特任講師

LACRC TMDU
IN CHILE
Latin American Collaborative Research Center
Santiago de Chile



Contents

ご挨拶	1
PRENECの進捗状況	2
プロジェクトセメスター	3
活動報告	4

PRENECの進捗状況

大腸癌早期診断プロジェクト(PRENEC)の最新情報をご報告いたします。

プンタ・アレナス、サンティアゴ、バルパライソ、バルディビア、オソルノ、コキンボの6都市に加えて、コンセプションでPRENECが開始されましたが、バルパライソとコンセプションで運営に関する問題が生じたため、現在、休止状態となっています。早期に問題が解決され、再開に向かうことが期待されます。国外ではパラグアイにおいて、PRENECのPilot studyが終了し、本格的な開始に向けて準備を進めています。

PRENEC講習会



講習会参加者との記念撮影

アントファガスタのグスマン病院とは、2016年にPRENECの拠点となるための調印を交わしたものの、州政府からの予算が獲得できず進捗してはいませんでした。しかしながら、継続的に州政府へのアピールや市民への啓発活動などを続けていた結果、今年に入り来年度の予算獲得が見込める状況になったため、11月11・12日の2日間にわたり、クリニカ・ラス・コンデス(以下CLC)にてグスマン病院の医師・看護師らを対象にPRENEC講習会を行いました。本講習では新規参加に必要な設備、運営方法、データの取り扱いなどへの説明を中心に行いました。

LACRCの小田柿助教は、PRENECにおける内視鏡治療や内視鏡トレーニングに関する発表を行い、講習参加者より高い関心が寄せられました。

アントファガスタでの準備が順調に進捗した場合、2020年1月に本格的な始動となる予定です。

オソルノにおけるPRENEC研究会

昨年に続き、PRENECの拠点の一つであるオソルノで、12月13日、PRENECに関する研究会が行われ、PRENEC責任者であるロベス医師、CLCのポンセ看護師とともに小田柿助教が招聘されました。

この研究会では、オソルノでのPRENECの進捗状況の報告があった他、ロベス医師、ポンセ看護師からはPRENEC全体の進捗や問題点、今後の展望などの説明がありました。小田柿助教は、PRENECでの大腸内視鏡トレーニングや内視鏡治療に関する発表を行いました。今後の発展に向けて有意義な場となりました。



巨大結腸モデル前での記念撮影

プロジェクトセメスター

本学医学科4年次の学生を対象とした学生海外基礎医学実習（プロジェクトセメスター）で、6月よりチリ大学に派遣されていた2名の学生の最終発表会が、10月30日にルイス・カルボ・マッケーナ病院にて行われました。例年、本学学生の受入が行われている感染症分野に加えて本年度は、認知神経科学分野の研究室も加わりましたが、両分野の充実した結果に教授陣より高い評価を得られました。

学生挨拶

澤口圭宏 チリ大学 感染症分野所属

ありきたりな言葉ですが、終わってみればあっという間の半年でした。留学の総括ということで何を話そうか大変悩ましい限りですが、留学を通してずっと意識していたスペイン語学習について話したいと思います。喜ばしいことに、全く話せない状態から今では軽い討論ならスペイン語でできるようになりました。その過程で意識していた2つのことを紹介します。

一つ目は「文化ごと学ぶ」です。言葉が通じないからと諦めずに、チリ人の集まりに積極的に参加しました。そのおかげで言語の背景にある文化への理解が深まり、また言語の本来の目的である人との対話という側面を常に楽しむことができたように思います。

二つ目は「失敗を恐れない」です。日本人なのだからもともとスペイン語を話せないのはあたりまえなのだという精神で、知っている単語をつなげて投げかけました。多少おかしくても意味は通じますし、やさしい人は正しい表現を教えてください。なんと無料のスペイン語の先生になってくれるわけです。

今回の留学を通じて言語面のみならず、人間として大きく成長することができました。研究室でお世話になった先生方を初め、生活面で助けて下さったLACRCの方々、そして多くの仲良くしてくれた友人に感謝を申し上げます。



研究室メンバー

原田大輝 チリ大学 認知神経科学分野所属

ようやく暖かくなり始めたこの頃11月上旬、まるでこちらに来たのが昨日のようです。最終月はなんとチリの神経科学学会に参加することができました。半年弱という短い期間ながらある程度の結果を出してポスターを作り、それを見ず知らずの人達に対して何回もプレゼンすることができ、非常に良い実践となりました。学会はサンティアゴからバスで北へ6時間ほどのLa Serenaという場所で行われました。海岸沿いの素晴らしいロケーションで様々な講演、議論が行われたのは、そもそも正式な学会という場に行くのが初めての自分にとって非常に感慨深いものでした。現在チリは大変不安定な状況でももちろん危ない面もありますが、チリを深く考えるキッカケにもなりました。学会でもこのトピック専用の議論が行われるなど一人一人がしっかりと問題意識をもって政治に日本よりも断然興味があると感じました。研究、政治、文化、人間関係など様々な要素に毎日身を晒されるこの留学は色々な面で自分の視野を広げ洞察を深くしてくれたと思います。

最後に全てのサポーターに感謝を示して終わりたいと思います。Chao!!



学会参加時の名札(@La Serena)

LACRC活動報告

パナソニック株式会社によるCLC施設見学

パナソニック株式会社健康保険組合からの派遣団が、同社チリ駐在員の受け入れに適した医療機関を選定するために訪智しました。

CLCにも視察に訪れることになったため、日本からの派遣団ということもあり、CLCの渉外担当者とともにCLCの施設案内をしました。その際に、短い時間でしたが、我々の活動についても紹介する機会がありました。

本拠点では、チリ在留邦人の方への診療の補助及び通訳は、業務として行っておりませんが、通訳会社の紹介や、このような見学の際にお手伝いをするもあります。

今後もこういった形で在留邦人の健康管理の一助となれば幸いです。



(左より)ハイメ事務補佐員、石幡氏、畑中氏、村野医師、小田柿助教、早川事務補佐員

サンチャゴ日本人学校学生の病院見学



ヘリポートでの記念撮影

サンチャゴ日本人学校から社会科見学の 일환として病院見学の依頼があったため、11月22日、日本人学校の学生を対象にCLCの施設見学を行いました。当日は、小学6年生が4名、中学生が7名の計11名が引率の先生方とともにCLCを訪れました。

我々と親交のあるCLCのサラテ先生の協力の下、CLCの救急部門、内視鏡部門、研究室の見学を行いました。

CLCの施設見学終了後、小田柿助教がサンチャゴ日本人学校に訪問し、チリと日本の医療システムの相違、本学のチリでの活動等についての講演を行いました。

こういった活動を通して、将来を担う新しい世代に少しでも医療や医療を取り巻く状況に対する理解が深まればと願っています。

ビニャ・デル・マルでの研究会への参加

10月5・6日、チリのビニャ・デル・マルにて第2回国際外科内視鏡研究会が開催され、スペイン、ブラジル、コロンビアの医師らとともに、小田柿助教が演者として招聘されました。

本学会は、治療内視鏡や超音波内視鏡をテーマに最新のトピックについての発表や、症例検討などが行われました。小田柿助教は、チリでの経験に基づいた胃がんに対する内視鏡的粘膜下層剥離術(ESD)に関する発表を行いました。



学会に参加したサン・ボルハ病院のスタッフとの記念撮影

バルパライソでの内視鏡治療サポート



左よりフェラダ医師、小田柿助教

LACRCの小田柿助教は、チリ国内の病院からの要請を受けて、現地の医師のみでは内視鏡治療を行うのが困難な症例のサポートを行っています。

10月5日、以前に小田柿助教の内視鏡トレーニングを受けた、クリニック・バルパライソのフェラダ医師からの要請を受け、大腸ポリープに対する内視鏡的粘膜切除術(EMR)のサポートを行いました。

今後もこういった活動を通して、チリの地域の内視鏡医師の技術の向上に貢献してまいります。

編集後記

チリでは10月18日、首都サンティアゴの地下鉄運賃引き上げに抗議するデモが起きたことをきっかけに、一部の抗議活動参加者が暴徒化し、チリ全土へと動きが広がりました。

幸い、CLC及び当拠点において被害はありませんが、予定されていた講習会の延期や、サン・ボルハ病院での検査や治療が一時中止となり、PRENECにも影響がでました。

新しい年とともに、少しずつ事態が収束されていくことを祈っております。(早川美貴)

東京医科歯科大学ラテンアメリカ共同研究拠点
Latin American Collaborative Research Center
Newsletter No.36 December 2019

[発行日] 2019年12月31日

[制作] Latin American Collaborative Research Center
Tokyo Medical & Dental University
Clínica Las Condes

Lo Fontecilla 441, Las Condes, Santiago, Chile

Tel: (56-2) 2610 3780

Email: LACRC-CHILE.adm@cmn.tmd.ac.jp

Newsletter

No. 37 March 31 2020

東京医科歯科大学ラテンアメリカ共同研究拠点

チリにおける新型コロナウイルスの状況

本年1月に中国で顕在化した新型コロナウイルスは、今や世界中に感染が拡大し、世界規模の問題となっています。

2月後半にブラジルで南米大陸初の感染者が報告されるまで、連日ニュースなどでは報道はあるものの、どこか対岸の火事のような状況で緊張感なく経過していました。

南米大陸への感染拡大により、チリの医療機関でも新型コロナウイルス患者への対策などが議論されるようになり、クリニック・ラス・コンデス（以下、CLC）でも、職員を対象とした新型コロナウイルス対策の講習会が開催されました。

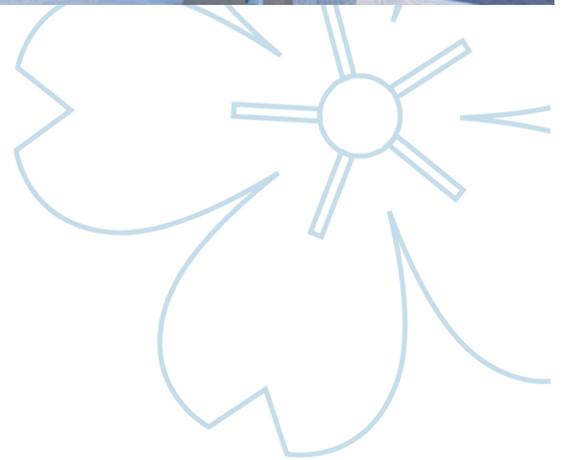
3月3日、休暇で東南アジア諸国を訪れた旅行者が帰国後にチリで初の感染者として報告されると、その後も、ヨーロッパやアジアなどの感染地域からの帰国者や家族、濃厚接触者を中心に新規感染者が増加し、3月中旬には感染経路が特定できない症例が急激に増加しました。3月18日にチリ政府は災害事態宣言（Estado de Catástrofe）を発令しました。これを受けて、国境閉鎖、教育機関の休校、商業施設の営業制限、公園などの公共施設の閉鎖、イベントの中止や延期、テレワークの推奨などの対策が始まりました。

感染者の増加のスピードが収まることがなかったため、3月下旬には症例数の多い地域を中心に全国各地で義務的外出制限が開始されました。

CLCがあり我々の住むラス・コンデス地区やサン・ボルハ病院があるセントロ地区も義務的外出制限の対象地域となったため、3月下旬から大腸癌早期診断プロジェクト（以下、PRENEC）の臨床活動は休止状態となりました。参加予定であったチリ国内の研究会なども全て中止となり、隣国のパラグアイで予定していたPRENEC開始に向けたシンポジウムも中止となりました。ジョイント・ディグリー・プログラム（以下JDP）の医学部長会議、チリ人JDP学生及びチリ大学医学部学生の本学への留学、国際シンポジウムENDOSURなどの延期も既に決まっています。

刻々と状況が変わっていくため先を予測することは困難ですが、恐らく4月以降も感染者が増加していくと思われます。チリや日本だけでなく、世界中の新型コロナウイルスによる犠牲者が最小限にとどまり、少しでも早い事態の収束と平穏な日常がもどってくることを願っています。

小田柿 智之 消化器病態学分野



LACRC TMDU
IN CHILE
Latin American Collaborative Research Center
Santiago de Chile



Contents

新型コロナウイルスの状況.....	1
PRENECの進捗状況.....	2
離任ご挨拶.....	3
活動報告.....	4

PRENECの進捗状況

大腸癌早期診断プロジェクト(PRENEC)の最新情報をご報告いたします。本年1月から新たにアントファガスタでPRENECが開始されました。プンタ・アレナス、サンティアゴ、バルパライソ、バルディビア、オソルノ、コキンボ、コンセプションの既存の7拠点に続く、国内8番目の拠点となりました。しかしながらバルパライソとコンセプションでは、運営に関する問題が生じており、現在休止状態となっています。国外ではパラグアイで、PRENECの開始に向けての準備が進んでいます。

アントファガスタにおけるPRENECの開始



アントファガスタのPRENECスタッフ

アントファガスタは、第2州、チリの北部にある人口約38万人の海沿いの都市です。

アントファガスタにあるグスマン病院とは、2016年にPRENECの拠点となるための調印を交わしたものの、州政府からの予算が獲得できず進捗がありませんでした。昨年になって予算面の準備が整ったため、グスマン病院の医療チームに対してPRENECを運営する上での手順や注意事項などの講習会をCLCで開催した後、本年1月からPRENECが開始されました。

新型コロナウイルスのチリ国内での感染拡大によって、現在は休止状態ですが、登録した患者に免疫学的便潜血反応検査を行い、陽性患者には大腸内視鏡検査が順次行われていく予定です。



啓発イベントにおける患者登録の様子



グスマン病院

Staff

2014年11月よりLACRCの業務に従事してきた小田柿智之助教が3月をもって離任されることとなりました。

離任挨拶

小田柿 智之 LACRC 消化器病態学分野

2020年3月をもって離任することになりましたので御挨拶させていただきます。

2014年11月20日にラテンアメリカ共同研究拠点(LACRC)に着任し、約5年5か月もの間、チリでの業務に従事させていただきました。

私のチリでの主業務は、大腸がん早期診断プロジェクト(PRENEC)のサンティアゴの拠点であるサン・ボルハ病院で、現地医師に大腸内視鏡検査・治療の指導をすることでした。赴任期間中に計20名のPRENEC専属の研修医師を受け入れ、彼らへの指導のため2000件以上の大腸内視鏡検査を担当しました。

また、日本では標準治療である早期がんに対する内視鏡的粘膜下層剥離術(ESD)が、チリでは殆ど普及していなかったため、サン・ボルハ病院にESDを導入し、約80症例の治療を行いました。サンティアゴだけでなくチリ全土から患者の紹介があり、昨年からはESDのための研修医師も受け入れて技術移転に勤めてきました。

私はチリに赴任する前、国立がん研究センター中央病院・東病院の消化管内視鏡科で内視鏡検査・治療に従事していました。内視鏡の分野は日本が世界をリードしていることもあり、自分が学んできた知識や技術を異国で役立てたいという思いから、LACRCへの赴任者として手を挙げさせて頂き、今に至っています。

赴任当初は、「日本だったら」という考えが全く抜けておらず、合理性や理想ばかりを優先し、もどかしい気持ちから現地のスタッフと衝突することもしばしばありました。しかし、チリの公立病院のシステムや医療保険制度を勉強し、文化や考え方の違いなどが理解できるようになるにつれ、チリの医療システムに適応して、その中で出来得る活動を心掛けるようになりました。異国の医療の発展に貢献するために現地に赴任しているのにもかかわらず、どこか「日本から指導にきてあげている」という驕りがあったのではないかと思います。徐々に考え方が変わり、相手を尊重していくことで、現地の方々は自然と受け入れてくださるようになり、積極的に私の業務に配慮してくださるようになりました。ここ数年は、「研修医師への指導」と「現地医師が対応困難な症例の内視鏡治療」が、サン・ボルハ病院の内視鏡チームの一員としての私の業務となり、周囲の皆が支えてくださったことで、やりがいのある充実した日々を過ごすことができました。

上述したサン・ボルハ病院の方々だけでなく、色々と相談に乗って頂いたPRENECの責任者のロベス医師やクリニカ・ラス・コンデス(CLC)の大腸肛門外科チームの方々、2018年度から大学院生と

して入学した Joint Degree Programでの基礎演習等の指導をしてくださったCLCの研究員の方々、LACRCの環境を整備してくださった前任の方々、公私ともにお世話になったLACRC事務補佐の方々など、チリで関わった全ての人に心より感謝いたします。そして、常に一緒にいてくれた妻と3人の子供達のお陰で異国でも寂しい思いをすることがなく、楽しい思い出を沢山作ることができました。この赴任期間は、私にとって一生の宝になると思います。

帰国後は、本学の消化器内科に所属します。日本からになりますが、引き続き、LACRCの活動に携わり、チリの医療に貢献することができればと切に願っています。

最後になりますが、チリでの新型コロナウイルスの感染拡大に伴い、3月18日に政府は災害事態宣言(Estado de Catástrofe)を発令しました。サンティアゴを含む全国各地で義務的外出制限(Cuarentena total)が開始され、現在も続いています。その影響で予定していた帰国ができず、4月以降に延期されました。また、このような状況に急になってしまったため、チリでお世話になった方々にきちんとした挨拶ができていないことが大きな心残りとなっています。

新型コロナウイルスが収束し、お世話になった方々に再会できる日が一日でも早く来ることを祈念しつつ、離任の挨拶とさせていただきます。



サン・ボルハ病院のスタッフと記念撮影

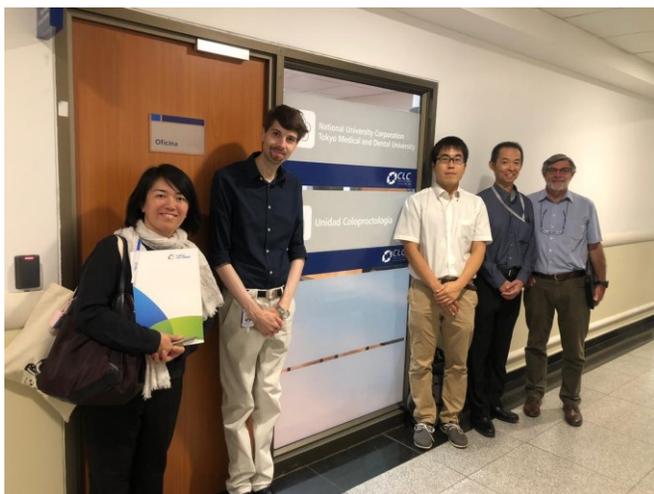
LACRC活動報告

JICA健康管理員のCLC見学

1月27日、南米のJICA職員の健康管理を担当するJICAボリビアの濱口陽子氏が、JICAチリ職員の傷病時の対応に適した医療機関を調査する目的でCLCを訪れました。LACRCから小田柿助教とハイメ事務補佐員も同行し、CLCの渉外担当者の案内の下、救急外来、ICU、ヘリポートを見学しました。

見学終了後、小田柿助教が、JDPの実習で通っている研究室やLACRCオフィスを紹介しました。

今回、お越しいただいた濱口陽子氏は、JICAボリビアに健康管理員として3年にわたり従事されており、以前、小田柿助教が、ボリビアを出張で訪れた際に大変お世話になりました。本年2月をもって任期を終えられるとのことで、今後の新天地での御活躍を祈念いたします。



LACRC拠点前にて、濱口氏(写真左)らとの記念撮影



CLC救急外来の様子

編集後記

長きにわたりご活躍されてきた小田柿助教が帰任の運びとなりました。

LACRC開設から今までの先生方が築き上げた、歴史ある本拠点の運営に、ハイメ事務補佐員とともに、今まで以上に力を合わせて取り組んでいく所存でありますので、ご声援いただけましたら幸いです。今後もNewsletterを通してチリの様子をお伝えしてまいります。より良い誌面を作成する為、皆様からのご意見・ご要望がございましたら気軽にLACRCオフィスまでご連絡くださいませ。(早川美貴)

東京医科歯科大学ラテンアメリカ共同研究拠点
Latin American Collaborative Research Center
Newsletter No.37 March 2020

[発行日] 2020年3月31日

[制作] Latin American Collaborative Research Center
Tokyo Medical & Dental University
Clínica Las Condes
Lo Fontecilla 441, Las Condes, Santiago, Chile
Tel: (56-2) 2610 3780
Email: LACRC-CHILE.adm@cmn.tmd.ac.jp

Newsletter

No. 38 September 30 2020

東京医科歯科大学ラテンアメリカ共同研究拠点

帰国報告

昨年度までラテンアメリカ共同研究拠点 (LACRC) に赴任していた小田柿智之です。7月10日に帰国し、2週間の隔離期間を過ごした後、7月27日から消化器内科の助教として本学に着任しました。

当初は3月末に帰国する予定だったのですが、サンティアゴでの新型コロナウイルスの感染拡大により3月中旬から義務的外出制限が発令されたことで、予定していた引っ越し荷物の搬出が延期になり、また世界的なパンデミックの影響により国際線が著しく減便した影響もあって、実際に帰国するまでに3か月以上もの間、チリで待機することとなりました。

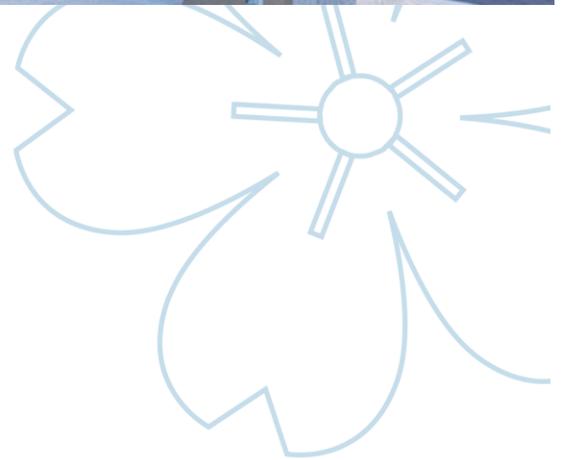
義務的外出制限下でも医療関係者の出勤は許可されていたのですが、保健省からの指示により緊急対応が必要な内視鏡処置以外は全て中止となったことで、大腸がん早期診断プロジェクト (PRENEC) の活動も休止になりました。

生活を維持するのに必要なこと (買い物、公共料金の支払い、銀行や役所での手続きなど) に限っては、ネット上で警察署に申請することで、1回3時間、週2回までの外出が許可されていましたが、異国の地で未知のウイルスに感染してしまうことへの不安が大きかったこともあり、宅配サービスを利用するなど、なるべく家から出ないようにして過ごしていました。

子ども達の通っていた学校や幼稚園も休校処置がとられましたが、すぐにオンラインでの授業が始まりました。小学3年生、1年生、幼稚園児ということもあり、特に下の二人は授業を受けるにあたって親のサポートが必要で、殆ど付きっきりのような状態でした。お互いに慣れないことで大変ではありましたが、一緒に絵を描いたり、工作をしたり、体育や音楽の課題を練習したりなど普段ではできないことに取り組むことができました。子ども達にとっては友達や先生と一緒にやった方が楽しいに決まっていますが、親としては貴重な経験をさせてもらったと思っています。外出できないことは、大人以上に子ども達にとって大きなストレスであったと思いますが、オンライン授業があったことで生活にリズムができましたし、先が見えない中で前向きに生活するための一助になっていたように思います。

チリでは、長期間の義務的外出制限などの効果もあってか新規感染者数が徐々に減少し、感染者の少ない地域から規制緩和が始まっています。PRENECは無症状者対象の検診プロジェクトであるため、優先度を考慮すると再開にはもう少し時間がかかるかもしれません。一日でも早くパンデミックが収束し、本学のチリでの活動が再開できる日が来ることを切に願っています。

小田柿 智之 消化器病態学分野



LACRC TMDU
IN CHILE
Latin American Collaborative Research Center
Santiago de Chile



Contents

巻頭言.....	1
新型コロナウイルスの状況.....	2
JDプロジェクト.....	3
PRENECの進捗状況.....	4

新型コロナウイルスの状況

チリにおける新型コロナウイルスの状況

前号でお伝えしたように、チリでは3月中旬に災害事態宣言(Estado de Catástrofe)が発令され、夜間外出禁止や義務的自宅待機措置が続きました。早期の対策により新規感染者数の増加が緩やかになったため、LACRCオフィスがあるラス・コンデス区など感染者の少ない地域では4月中旬に外出制限が解除されました。しかしながら、規制緩和後に新規感染者数が急増したことから、解除から2週間程で再び夜間外出禁止、義務的自宅待機措置がとられました。

6月中旬には、長引く感染拡大により医療体制が逼迫したことに加えて、保健省が発表する新型コロナ関連死亡者数に誤りが発覚したことなどから、責任を取る形で保健大臣が交代する事態となりました。LACRCオフィスがあるクリニカ・ラス・コンデス(以下CLC)でも、新型コロナウイルス患者の急増に備えて対策を講じていたものの、予想を上回る勢いで患者が増え、対応に当たっていた医療・事務スタッフの感染も相次ぐなど多くの混乱が生じました。サンティアゴの一部の医療機関では重症患者に対応できる病床数が確保できなくなり、比較的余裕のある地方の病院へ患者を搬送するなどの対策が取られました。

経済への影響は深刻で、失業者の増加、貧困の深刻化に対し、チリ政府は低所得層への支援として食料品・生活必需品の救援物資を用意し、一定の基準を満たす中間所得層には給付金の支給、長期の低利貸し付け、ローン返済期限の延長、さらに、AFP(確定拠出型年金)の積立金の10%を引き出すことを可能とする措置などをとりました。市民レベルでも、有志で食料品・生活必需品の配布、失業者への炊き出し等が行われました。

また、チリのこのような状況に対し、日本政府は無償資金協力による医療機器支援を行うことを決定しました。同支援に関する署名式の様子は、当地のメディアで報道されました。(左下写真)

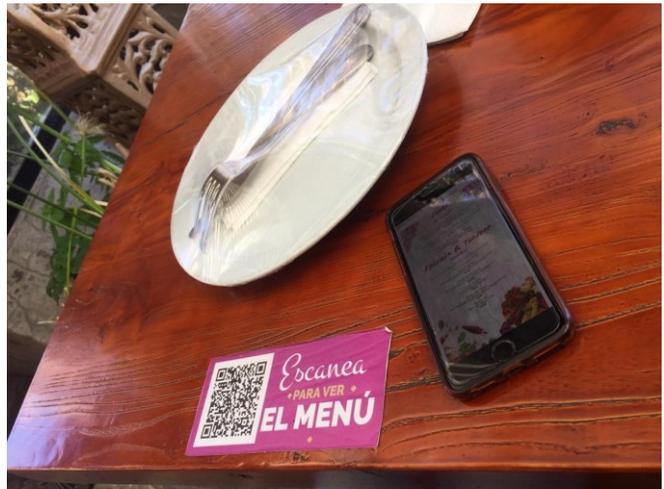
7月下旬以降ようやく感染拡大の勢いが収まり、現段階で累計感染者数は約46万人、1日当たりの新規感染者数はピーク時には約7,000人で推移していましたが、現在では約1,000人まで減少し、首都圏州の一部から順に規制緩和が徐々に進んでいます。多くの在留邦人が住む地区では、自宅待機措置が解除され、感染対策を講じた商業施設の再開が始まっています。

例年、9月の連休には、国を挙げて独立記念日(通称:El Dieciocho)を祝いますが、規制緩和されていない地区も未だに多くあり、家族や友人との時間を大切にすチリの人々にとって、今年は寂しい独立記念日となりました。

世界のいたるところで第2波、第3波が注視され厳しい状況が続いていますが、一日も早く安心して過ごせる日が戻ってくるのを祈念しております。



署名式典の様子(在チリ日本大使館提供)
左より平石特命全権大使(当時)とアラマンド外務大臣



レストランでは、感染対策の観点で紙のメニューからQRコードを用いたデジタルメニューへの導入が進んでいる。

ジョイント・ディグリー・プログラム

前号でお伝えしたように、新型コロナウイルスによるパンデミックは、ジョイント・ディグリー・プログラム(以下JDP)にも大きな影響を与えています。チリ大学では3月下旬より対面授業を中止としており、学生は例年とは違う形での学修を余儀なくされました。また、本年4月に本学で学修予定であった第一期生の渡航が急遽中止となり、未だに渡航の予定が立てられずにいます。本号では、パンデミック下で、仕事と学生生活の両立に奮闘する第四期生、カサーナ医師の様子をお届けします。

新型コロナウイルス下における経験と学生生活

カルラ・アレサンドラ・カサーナ・アバド医師 東京医科歯科大学・チリ大学国際連携医学系専攻

COVID-19によって引き起こされたパンデミックは、誰も予期しなかった形で世界中に影響を与えました。世界中の全ての人にとって非常に困難な時期ですが、特にこの緊急事態下において第一線で戦うこととなった医療従事者にとっては大きな挑戦となりました。

私は外科医ですが、外科の患者のみならずCOVID-19の患者の対応も行っています。私が働いている救急外来では、専門家を問わず全ての医師が、呼吸器系疾患の診断や治療方針に関する研修を受け、救急搬送される多くの患者を必死に対応しています。

また、JDPの講義はリモート形式に変更されましたが、分子生物学では研究室での実習があったため、受講するのが容易ではありませんでした。しかしながら、私の担当教官の方々是非常に協力的であり、ビデオ、オーディオ、書誌セミナーなどのツールを用いて受講できるように色々対策を講じてくださいました。様々な講義を受ける中で、世界中の多くの科学者がSARS-CoV-2に関する研究内容や結果を既に発表していることを知り、この疾患に対する研究のスピードに驚かされました。

私はCOVID-19によって愛する人を失い、世界中で何千人もの医療関係者を含めた多くの人々を失いました。感染者の増加を目の当たりにすることは、非常に辛いことであり、また同時に感染拡大を抑えるための外出制限の維持を重要視しない多くの人々の良識の欠如にはやるせない思いでした。我々のような医学や科学に従事するものにとって、たとえ一人であっても救えない命があることは非常に大きなことです。今回のような世界中の人々の健康に影響を及ぼす疾患に備えて研究と臨床の両面から取り組んでいくことは非常に重要なことであり、大学院で研究を続けるために出来る限り努力することはとても意義のあることだと思います。

今回のパンデミックで私たちは多くの苦難に直面しました。しかしながら、困難な状況であるからこそ、医学教育には研究と臨床の両面が必要であることが理解できましたし、健康ほど大切なものはないということに気付かされました。



救急外来勤務後の防護マスク跡

JDP学生による医学部学生への特別講義



特別講義のポスター

8月19日、JDPの国際連携医学系専攻第四期生であるカサーナ医師が、本学の学生としてアンドレス・ベジョ大学ビーニャ・デル・マールキャンパス医学部学生にデジタルツールを使用した論文作成に関する特別講義を行いました。

新型コロナウイルスの影響もあり、講義はオンライン形式で行われましたが、130名程の学生が参加したことから関心の高さがうかがえました。

現役のJDP学生による特別講義ということで、本学のJDPを多くの医学部学生に知ってもらう良い機会ともなりました。

PRENECの進捗状況

大腸癌早期診断プロジェクト(PRENEC)の最新情報をご報告いたします。3月より新型コロナウイルスの影響を受けて全面的なPRENECの活動の休止が余儀なくされていましたが、7月にPRENECの各拠点や南米諸国に向けてのWebinar(オンライン講習会)が行われましたのでその様子をお伝えいたします。

オンライン講習会開催



**WEBINAR
CIRUGÍA DE
COLON**

TÍTULO:
"TRATAMIENTO DEL CÁNCER
COLORRECTAL PRECOZ EN EL
MARCO DE UN PROGRAMA DE
CRIBADO"

MODERADOR

 **Dr. Francisco López Kostner**
Jefe Unidad de Coloproctología CLC.
Director de PRENEC (Programa de Prevención de Heñaditos Colorrectal)

EXPOSITORES

 **Dr. Udo Kronberg**
Cirujano Coloproctólogo
Unidad de Coloproctología
Clínica Las Condes

 **Dr. Claudio Wainstein**
Cirujano Coloproctólogo
Centro de Especialidades en Piso Pelviano CEPP
Unidad de Coloproctología
Clínica Las Condes

TEMAS

PRESENTE Y FUTURO DE LA RED
PRENEC (Programa de Prevención de Heñaditos Colorrectal)
NOVEDADES
Dr. Francisco López Kostner

TRATAMIENTO ENDOSCÓPICO
DEL CCR
Dr. Udo Kronberg

CONSEJOS EN LA CIRUGÍA LAP
DEL CCR PRECOZ
Dr. Claudio Wainstein

PREGUNTAS Y DISCUSIÓN

Webex Meeting

Cisco
webex

講習会のポスター

7月23日、CLC大腸肛門外科の医師らによって、「スクリーニングプログラムにおける早期大腸癌治療」に関するWebinarが開催されました。

PRENECの各拠点長やスタッフだけでなく、エクアドル、コロンビア、パラグアイ、ペルーからの医師も含め40名程の参加がありました。

内視鏡的・外科的治療における最新の知見や技術の発表に加え、PRENEC責任者であるロペス医師は、PRENECにおける今までの歩みと実績、本学の日本人医師らの協力について強調されていました。

また、新型コロナウイルスの影響を受けて、PRENECの待機患者が増加している問題についても取り上げられ、今後の対策について意見交換が行われました。現状では、PRENECの活動の再開は決まっておりませんが、今回のようなWebinarを通じた講習会や意見交換会は今後も開催される予定です。

編集後記

チリでは、新型コロナウイルスの影響を受けて延期となっていた憲法改正の投票が10月に予定されており、現在、国民の間で大きな関心事となっています。憲法改正の賛否を問う国民投票が迫り、賛成派と反対派の論争が始まっています。憲法改正案が通った場合は、さらに現行憲法の改正内容が議論され、約2年のプロセスを経て施行となります。国民投票の結果がどうであれ、チリの将来にプラスとなる結果になることを願っています。

今後もNewsletterを通してチリの様子をお伝えしてまいります。(早川美貴)

東京医科歯科大学ラテンアメリカ共同研究拠点 Latin American Collaborative Research Center Newsletter No.38 September 2020

[発行日] 2020年9月30日

[制作] Latin American Collaborative Research Center
Tokyo Medical & Dental University
Clínica Las Condes
Lo Fontecilla 441, Las Condes, Santiago, Chile
Tel: (56-2) 2610 3780
Email: LACRC-CHILE.adm@cmn.tmd.ac.jp



Newsletter

No. 39 March 31 2021

東京医科歯科大学ラテンアメリカ共同研究拠点

特別寄稿

「親愛なる東京医科歯科大学の皆様へ」

チリ及びラテンアメリカにおける東京医科歯科大学の活動をお知らせする Newsletter の本号に寄稿させていただけることを非常に光栄に存じます。

ご存知のように、チリの大腸がん死亡率を減少させることを目的に、2010年にクリニカ・ラス・コンデス(以下CLC)、チリ保健省(以下MINSAL)及び東京医科歯科大学(以下TMDU)の間で三者協定が締結され、Programa Nacional de Neoplasias Colorrectales(以下PRENEC)という大腸がん早期診断プロジェクトが始まりました。PRENECを実施してきたマガジャネス州(チリの最南端)においては、ここ数年の大腸がん死亡率の上昇が抑えられてきており、この大腸がん予防戦略を立ち上げられたことを非常に誇りに思っております。発展途上国においてこの種の癌は増加の一途をたどり、公共政策が充分でないことから成す術がないのが一般的であるためこれは画期的な出来事です。これはひとえに、TMDUの指導者らの多大なる貢献によるものであったことを強調したいと思えます。

また、TMDUの協力により、チリの大腸がん検診プロジェクトを立ち上げただけでなく、コロンビア、ペルー、ポリビア、エクアドル、パラグアイの医療チームへの研修を行うこともできました。パラグアイはラテンアメリカにおいて最大の経済的困難を抱えている国の一つであるものの、大腸がん予防戦略が既に実施されており、良い成果が報告されています。

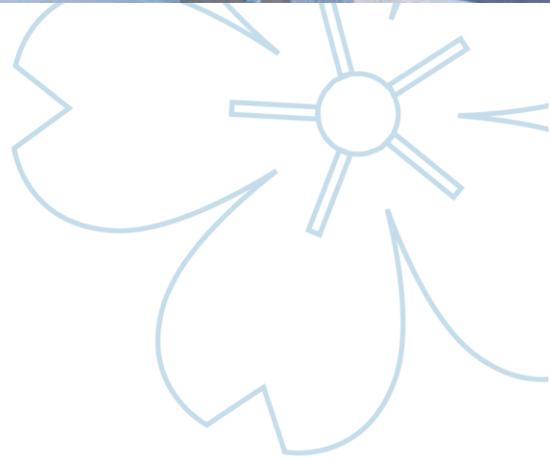
COVID-19のパンデミックの影響でPRENECの活動は休止状態になってしまったものの、ジョイント・ディグリー・プログラム(以下JDP)内で消化器系の医師を対象とした消化器腫瘍学に関する臨床及び研究の両面を含んだトレーニングプログラムを開始することができました。本プログラムは、チリ及びラテンアメリカの医師が、日本の医療と同じ水準に到達することを目的としています。

これまでの活動が認められ、この度、私は正式にチリ保健省における大腸がん分野の顧問に任命されました。私の使命は、PRENECのようながん予防ネットワークの開発を支援し、国内におけるがん研究と治療の為に様々な策を講じていくことです。TMDUとチリ大学の名に誇りをもって、これらの責務に取り組んでいく所存です。

大規模な集団ワクチン接種により、長いトンネルの先に光が見えるようになることを期待しています。2021年下半期には、学術活動や専門研修及び国内でのPRENECを再開できることを願っています。また、2022年初旬までには、TMDUからの協力を得て、チリ及びラテンアメリカの医師への消化器内視鏡トレーニングプログラムの再開も切望しています。改めまして、これまでのTMDUの協力に感謝の意を表します。

最後になりますが、皆様のご発展を祈念するとともに、我々はLACRCオフィスを通してラテンアメリカの公衆衛生に寄与できる道を構築し続けてまいります。

フランシスコ・ロペス チリ保健省大腸がん分野顧問・PRENEC責任者



LACRC TMDU IN CHILE
Latin American Collaborative Research Center
Santiago de Chile



Contents

巻頭言(特別寄稿)	1
JDP	2
PRENECの進捗状況	4
LACRC活動報告	5

ジョイント・ディグリー・プログラム

チリにおける JDP のプログラム責任者であった植竹宏之教授の退職に伴い、昨年 12 月より絹笠祐介教授が学術委員会委員長に就任しました。新体制では、長堀正和准教授及び岡田卓也講師が学生の指導を担当することとなりました。

JDP 学部長会議

日本時間 3 月 16 日 (チリ時間 3 月 15 日) に本学及びチリ大学の学部長及び教授で構成される学部長会議がテレビ会議システムを用いて開催されました。本会議では、例年通り一年間の JDP の総括、自己点検・評価報告書について報告が行われました。これに加えて、本年はプログラムが始まってから 5 年目という節目であることから、プログラムの改善に焦点を当てた協議が行われました。今後のプログラムが充実したものとなるように、両大学が協力して運営を進めてまいります。



JDP 学部長会議の様子

JDP4 大学合同の教職員 FD 研修 (Faculty Development Seminar 2020) 開催

University of Chile, Chulalongkorn University, Mahidol University and TMDU
Joint Degree Doctoral Program in Medical Sciences

Faculty Development Seminar 2020

For all employees and students
March, 2021

University of Chile, Chulalongkorn University, Mahidol University and TMDU present

Taking Down The Splenic Flexure in Lap Colorectal Surgery: Why, When and How?
Dr. Mario Antonio Andrade Moreira
M.D., Chief of the Coloproctology unit, Associate Professor
Coloproctology Unit, Clinical Hospital Universidad de Chile, Coloproctology Unit, Clinica Las Condes

The role of Thai Royal Dental College in graduate studies in Thailand
Dr. Petchai Jantavisorn
D.D.S., M.S., Ph.D., Dean, Associate Professor
Department of Oral and Maxillofacial Surgery from Chulalongkorn University

Joint and double PhD programs in Mahidol University
Dr. Theeworschal Limjindaporn
M.D., Ph.D., Deputy Dean of Postgraduate Education, Associate Professor
Department of Academy from Mahidol University

Changes in Education and Research activities in TMDU by Covid-19 pandemic
Dr. Seichi Akita
M.D., Ph.D., Deputy Director, International Exchange, Division Head, Joint Degree Program Advancement Division, Professor
Department of Clinical Anatomy from TMDU

Inquiry: JD&MPH unit: jd@ml.tmd.ac.jp

Inquiry: Joint Degree Team, Educational Planning Section (Ext.4676)

FD 研修ポスター

年に一度、本学とチリ大学の教員の能力向上と意識を共有するために両大学間で実施されている教職員 FD 研修が、本年 3 月に初の試みとなる JDP3 専攻 (チュラロンコン大学、チリ大学、マヒドン大学) 合同で行いました。

新型コロナウイルス感染拡大の影響で、講演者は各大学にて講演を行うことになりましたが、時差の関係からリアルタイムでの開催が難しいため、各講演者の講演動画を一本の動画に集約し、各大学にてオンデマンドで開催することとなりました。本学からは秋田恵一教授に講演をいただき、コロナ禍における本学の教育・研究への取り組みを中心に講演をいただきました。それぞれの大学において進行している JDP の更なる向上に資するよう有意義な機会となりました。

本学教員によるオンライン指導

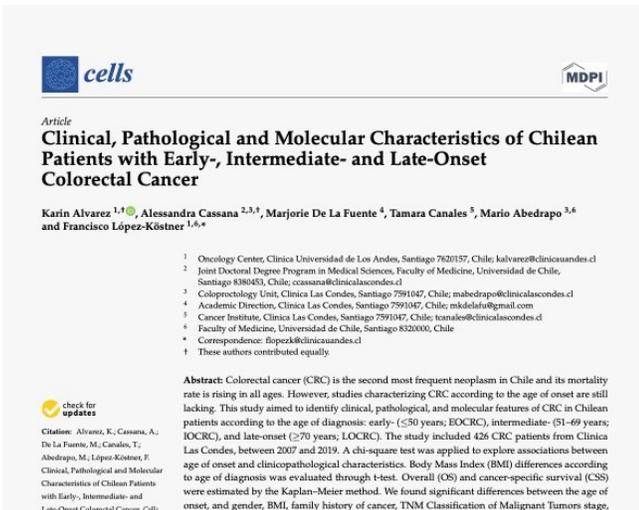


オンライン会議システムによる授業の様子

新型コロナウイルス感染拡大の影響を受けて、昨年4月に予定されていたJDP第一期生のディエゴ・サモラーノ医師の来日が、現在延期されています。今後の渡航の予定が立たないことから、プログラムの変更を余儀なくされていますが、これに対して岡田講師よりオンライン会議システムを通してオンライン指導という形で必修科目である「大腸肛門外科臨床応用Ⅱ（東京医科歯科大学）」の授業を実施しました。

二国間で構成されているプログラムのため、学修する上で学生は疑問や不安を抱くこともありますが、こういったオンラインによるサポートを通し、この困難な状況下にある学生の不安を少しでも払拭することにつながることを願います。

学術誌への論文掲載



学術誌Cellsオンライン版掲載記事

3月12日、本プログラムの国際連携医学系専攻第四期生であるアレサンドラ・カッサーナ医師、指導教官であるフランシスコ・ロペス医師、マリオ・アベドラポ医師及び研究者による論文「Clinical, Pathological and Molecular Characteristics of Chilean Patients with Early-, Intermediate- and Late-Onset Colorectal Cancer」が学術誌Cellsに掲載されました。

本研究では、2007年から2019年の間の426名のCLCの大腸がん患者を診断時の年齢別に若年層、中年層、高齢層の3つのグループに分けて解析することで、臨床的、病理学的、分子学的な特徴を報告しました。

このような研究はチリでは初めてのこととなり、今後のチリの大腸がん患者の診断や治療の一助となることが期待されます。

(参考URL: <https://www.mdpi.com/2073-4409/10/3/631/htm>)

PRENECの進捗状況

PRENECの最新情報をご報告いたします。昨年3月より新型コロナウイルスの影響を受けて全面的なPRENECの活動の休止が余儀なくされています。

また、昨年8月に、PRENEC責任者であるロペス医師がCLCを退職されました。PRENECは本学とCLC、チリ保健省の三者協定下に運営されていることから、CLCから離れてしまったロペス医師の今後の立場が懸念されましたが、巻頭言でも報告させていただきましたように、本年1月にチリ保健省の大腸がん分野の顧問及びPRENEC担当に就任することになりました。パンデミックの状況に左右されてしましますが、この新体制のもと、できるだけ早期にPRENECが再開できるよう取り組んでいく所存です。

サン・ボルハ病院の火災

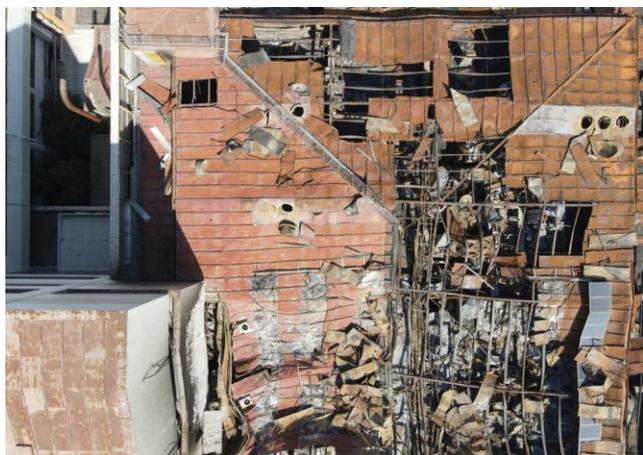
1月30日、PRENECの拠点の一つである日智消化器病研究所のあるサン・ボルハ病院で大規模な火災が起き、入院・外来患者が避難する事態となりました。病院スタッフの懸命な対応で幸い死者が出ることはなかったもののこれによる被害は大きく、未だ通常診療の再開には至っていません。

過去のNewsletterでも紹介しているように、同研究所は本学との繋がりが深く、40年以上の歴史があります。PRENECにおいても、同研究所内に大腸内視鏡トレーニングコースが開設され、本学からの拠点員の活動の場として重要な役割を果たしてきました。また、国際協力機構（JICA）や外務省「草の根・人間の安全保障無償資金協力」等の支援を受けてチリの消化器医療に貢献してきた背景もあり、2017年には、秋篠宮皇嗣殿下・妃殿下がご視察に訪れました。

サン・ボルハ病院はチリ大学の主要関連病院の一つで、PRENECにおける重要な拠点である以外にも多くの役割を担ってきました。サンティアゴでの医療における影響は甚大であり、一日も早い復興を切に願っております。



日本及びチリの国旗を手にする日智消化器病研究所のスタッフ



火災後の建物上部の様子



天井が崩れ落ちた院内の様子

LACRC活動報告

ラテンアメリカ時報への記事掲載

ラテンアメリカ協会の季刊会報誌である「ラテンアメリカ時報(2020/21年冬号)」へ元LACRC派遣教員の小田柿智之助教の記事が掲載されました。

同協会は、1958年より日本とラテンアメリカ諸国との交流推進及び国内外への関連情報の発信を行っている伝統ある協会で、会員である企業、団体、個人、駐日ラテンアメリカ公館の他、全ラテンアメリカ諸国駐在の日本公館で広く配布されています。

今回、その会報誌内の「33か国リレー通信」の項で本学のラテンアメリカにおける歴史や取り組み、チリの医療事情等を紹介しました。ラテンアメリカと関係が深い方々へ本学の活動を周知する良い機会となりました。

(参考URL: <http://latin-america.jp>)



ラテンアメリカ協会会員専用ページ内の掲載記事

Euronewsへの出演



Euronewsオンライン版掲載記事

昨年12月に元LACRC派遣教員であり、本学附属病院国際医療部長である岡田卓也講師がEuronewsに出演しました。

Euronewsはヨーロッパの主要放送局のテレビニュースを伝えるニュース専門放送局です。

コロナ禍の日本における外国人の様子や、日本語の理解が十分でない方への本学の取り組みを紹介しました。

(参考URL: <https://www.euronews.com/2020/12/15/japan-an-inclusive-covid-19-response>)

編集後記

チリでは新型コロナワクチンの大規模な接種計画が進められています。チリではPfizer-BioNTec製、AstraZeneca-Oxford製、Sinovac製のワクチンが現在までに承認されており、さらにJohnson & Johnson製、CanSino製、ロシア製ワクチンの承認も今後見込まれていることからワクチンの供給は順調に進み、3月31日現在、人口の約3割強にあたる650万人以上が第一回目の接種を終えています。

有効性や安全性を注視しつつ、ワクチンが現況を打破してくれることを願います。(早川美貴)

東京医科歯科大学ラテンアメリカ共同研究拠点
Latin American Collaborative Research Center
Newsletter No.39 March 2021

[発行日] 2021年3月31日

[制作] Latin American Collaborative Research Center
Tokyo Medical & Dental University
Clinica Las Condes
Lo Fontecilla 441, Las Condes, Santiago, Chile
Tel: (56-2) 2610 3780
Email: LACRC-CHILE.adm@cmn.tmd.ac.jp

Newsletter

No. 40 September 30 2021

東京医科歯科大学ラテンアメリカ共同研究拠点

コロナ禍における国際協力について

本号では、本学病院消化器内科（臨床試験管理センター所属）の長堀正和が巻頭文を担当いたします。

チリにおけるジョイント・ディグリー・プログラム（以下JDP）では、網笠祐介教授（本学消化管外科分野）のご指導のもと、チリ大学およびクリニカ・ラス・コンデス（以下CLC）と協力しながら、プログラムの管理運営、履修生の教育、評価に参画しております。メールでのやり取りに加えて、先方とのコミュニケーションは、月1回のTV会議（公用語はスペイン語）が中心となっております。13時間という時差の問題で苦

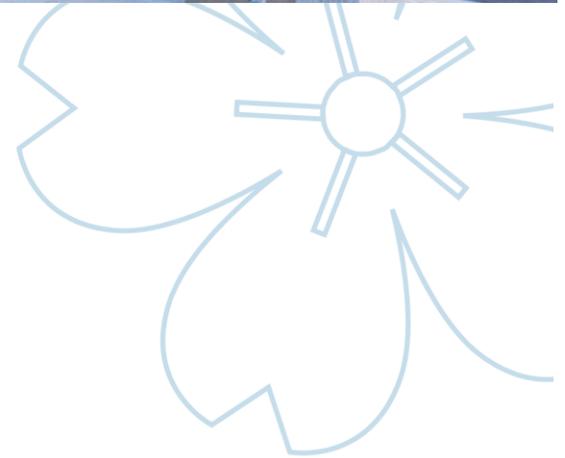


労することもあります。パンデミックのお陰？で、TV会議自体に慣れてきたということもあり、地球の裏側を意識することなく、プログラムの運営に携わっています。南米の履修生に関しては、予定されていた訪日ができない状態が続いていましたが、規制緩和に伴い、学生の訪日の希望は高まっているようです。現在、履修科目は、消化器領域に限定されておりますが、訪日して、実際に、最先端の消化器病学および診断・治療手技を学びたいという声を頻繁に耳にします。また、先日は、先方のリクエストもあり、TMDUの紹介ビデオを作成し、提供しておりますので、入学希望者の増加が期待されます。また、本学のプロジェクトセメスター学生の受け入れ再開も期待されるようです。

長年に渡る、多くの先生方の人的交流の歴史を土台とし、前述でのTV会議では、両大学の研究者間で、お互いに、パンデミックの様々な影響を心配する会話もあります。指定国立大学として、構想通り「国際協働の推進」が求められる本学において、本プログラムの活性化およびその広がりにより、両大学の研究者の連携などが進むことを期待したいと思います。

最後に、本プログラムの運営をサポートしていただいております、本学の国際交流課（統合国際機構）のソニア・レオン・カマラ係員、ラテンアメリカ共同研究拠点の早川美貴事務補佐員、ハイメ・ウレホラ・スコラリ事務補佐員の皆様には、この場を借りてお礼を申し上げます。

消化器内科分野 長堀正和 准教授



LACRC TMDU IN CHILE
Latin American Collaborative Research Center
Santiago de Chile



Contents

ご挨拶	1
JDP	2
LACRC活動報告	4

ジョイント・ディグリー・プログラム

公式HPリニューアル・Facebookページ開設

2016年より本学がタイのチュラロンコーン大学、マヒドン大学、及びチリ大学間で行っているJDPの公式ホームページが4月にリニューアルされました。また、併せて公式Facebookページも開設されましたのでお知らせいたします。

プログラム案内、受験生に役立つ情報等に加えて、チリ拠点からは主にチリ大学におけるJDPの活動や取り組みを定期的に発信してまいりますので、当ホームページ及びFacebookページへのアクセスをお待ちしております。



公式ホームページ
(参考URL: <https://www.tmd.ac.jp/cmn/jdp/>)



公式Facebookページ
(参考URL: <https://www.facebook.com/tmdu.jointdegreeprogram.jp>)

JDP学生のオンライン履修



オンライン講義を受講するカッサーナ医師

JDP国際連携医学系専攻第四期生のアレサンドラ・カッサーナ医師は、現在、在学2年目の後半にさしかかっています。

新型コロナウイルスによる影響で多くの科目をオンライン形式で履修していますが、仕事と学生生活を両立させながらも、7月には今年度分のオンライン講義を全て履修し、順調に進めています。

今後は、10月から公立病院における臨床実習が開始し、さらにその後、進級試験を経て本格的な研究活動に至ることになります。

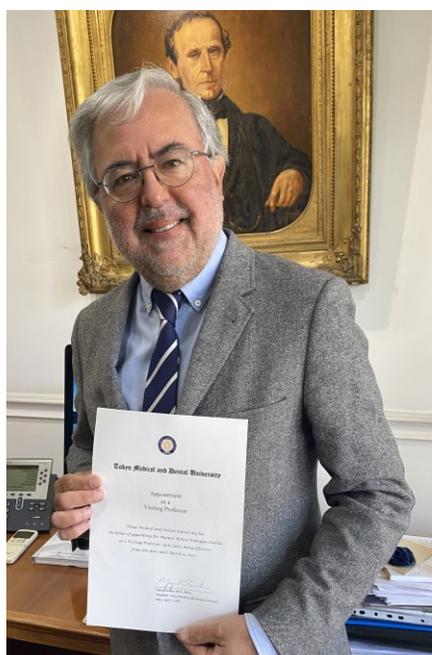
新型コロナウイルスにより見通しが立たないことが多くありますが、このまま学修・研究活動に大きく影響が出ることなく進捗することを願います。

客員教授付与

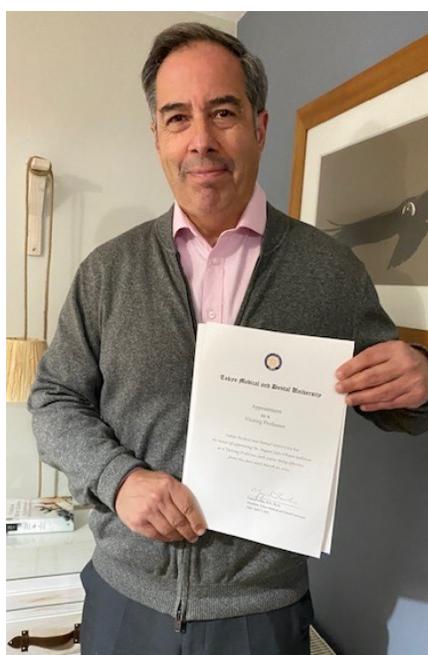
本学では毎年、我々の活動に貢献していただいている関連機関の方々に客員教授を付与しております。

本年4月に、本学との繋がり深いチリ大学のマヌエル・ククルジャン医学部長、ミゲル・オライアン教授、フランシスコ・ロペス准教授へ客員教授が付与されました。新型コロナウイルスの影響で郵便状況が悪く時間を要しましたが、9月には、客員教授付与証をお手元にお届けすることができました。

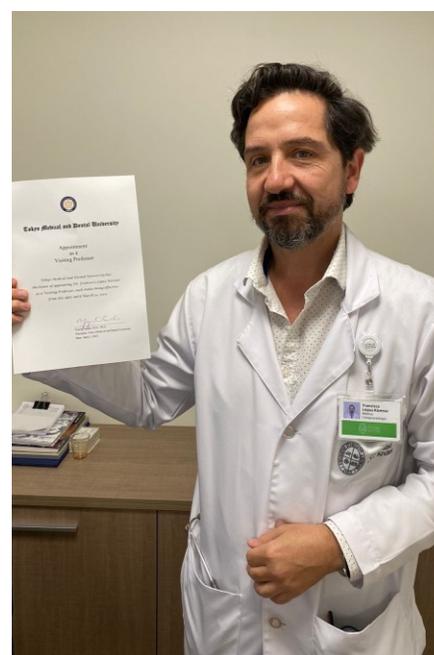
今後も引き続き、JDPiにおいて両大学相互の協力が円滑に行われることが期待されます。



マヌエル・ククルジャン医学部長



ミゲル・オライアン教授



フランシスコ・ロペス准教授

LACRC活動報告

ペルー学会への参加

4月15日、元LACRC派遣教員の小田柿智之助教とチリ保健省大腸がん分野顧問及びPRENEC責任者のロペス医師がペルーの学会“XII Curso Internacional de la Clínica Centenario Peruano Japonesa”に参加しました。

小田柿助教は「日本における大腸がん検診」、ロペス医師は「チリにおけるPRENEC」に関する発表を行いました。

本学会に参加した経緯は、小田柿助教とロペス医師が2016年にPRENECを中南米諸国に展開するための一環としてペルーに出張した際に訪れた日秘移住百周年病院(Clinica Centenario Peruano Japonesa)のグスタボ・キシモト医師から、将来的にペルーでがん検診を展開するために、日本とチリのがん検診を本学会で紹介して欲しいとの要請があったためです。

コロナ禍により未だ渡航をするのは難しい状況が続いており、本学会にも予め用意したビデオを流す形での参加になってしまいましたが、今後も中南米の医療に貢献できるよう努めてまいります。



学会ポスター



2016年ペルー出張写真より(右から1番目:小田柿助教、2番目:キシモト医師、4番目:ロペス医師)

編集後記

日本では自由民主党の総裁選挙が大きな話題となりましたが、チリでは、11月に大統領選が予定されており、これに向けて日に日に候補者の報道が盛んになってきています。

現在までの民間世論調査では、左派のポリッチ氏が有力な候補者とされていますが、一方で中道右派のシチェル氏も多くの支持を得ています。

どちらの候補が大統領になったとしても、新型コロナウイルスの影響で打撃を受けた経済や国民の生活が改善するような政策を打ち出してくれることを願っております。(早川美貴)

東京医科歯科大学ラテンアメリカ共同研究拠点
Latin American Collaborative Research Center
Newsletter No.40 September 2021

[発行日] 2021年9月30日

[制作] Latin American Collaborative Research Center
Tokyo Medical & Dental University
Clínica Las Condes
Lo Fontecilla 441, Las Condes, Santiago, Chile
Email: LACRC-CHILE.adm@cmn.tmd.ac.jp